

第3章 子育てをめぐる保護者の意識と負担感

この章では、保護者が普段子育てや家族に対して感じていることについて分析を行った。分析の目的は、以下の2点である。第一に、保育園や幼稚園を利用する親の子育て観や家族規範意識を知ることにより、子どものおかれた家庭環境を理解すること、第二に、どのような状況にある親が、家事、育児に対する負担感や、不満感を抱いているかを明らかにすることによって、園のサポートする方向性について示唆を得ることである。

こうした問題意識をもとに、以下の4つの分析を行った。①保護者の持つ子育て観、家族規範の現状を、属性ごとの比較を通して明らかにする。②子育て観や家族規範と育児不安の関連性に焦点をあて、どのような意識を持つ人に育児不安が高いかについて分析する。③家事・育児と仕事の負担感や生活に対する満足度の現状を示し、どのような属性の親に負担感が高く、現在の生活に不満を抱いているかを明らかにする、④園からのサポートと家事・育児と仕事の負担感や生活満足度の関連性を探る。

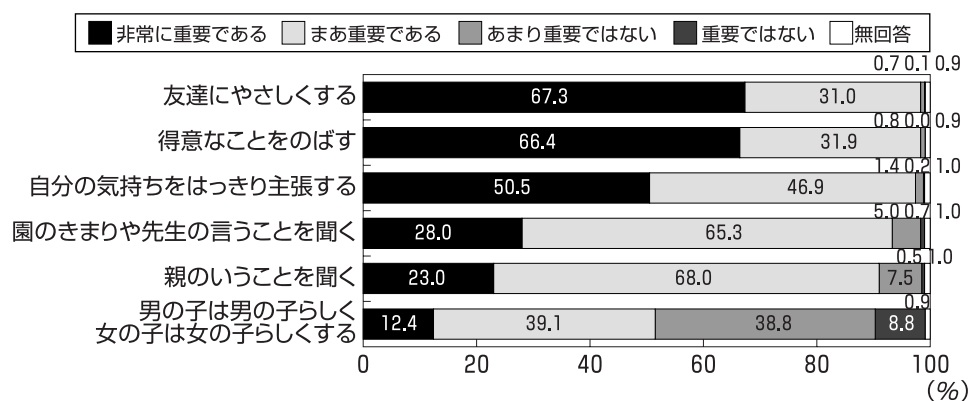
1. 保護者の子育て観・家族規範意識

(1) 子育て観

①全体的な傾向

子育て観を6項目あげ、それぞれについて「非常に重要である」から「重要ではない」までの4段階評価で、保護者が回答した結果を示したものが図表3-1である。「非常に重要である」という回答が最も多かったのは「友達にやさしくする」という項目で67.3%を占めている。続いて「得意なことをのばす」(66.4%)、「自分の気持ちをはっきり主張する」(50.5%)が支持されている。「園のきまりや先生の言うことを聞く」(28.0%)や「親のいうことを聞く」(23.0%)は「非常に重要である」という回答は少ない。しかし「まあ重要である」という回答をあわせると、どちらも9割を超えており、ほとんどの親が重要であると考えている。それに対し、「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくする」という項目については、重要であるとする親と、重要ではないとする親にほぼ二分されることがわかった。

図表3-1 保護者の子育て観



②保育園・幼稚園・母親・父親の比較

次に、保育園、幼稚園、父親、母親といった属性別に子育て観をみていく。図表3-2は、子育て観の6項目について、「非常に重要である」を4点、「まあ重要である」を3点、「あまり重要ではない」を2点、「重要ではない」を1点とし、その平均点を保育園・幼稚園・母親・父親別に示したものである。一元配置の分散分析を行った結果、すべての項目で有意な差がみられたが、多重比較をしてみると、次の項目で差が大きくなっていることがわかった。まず、「得意なことをのぼす」という子育て観の平均点は、幼稚園母親で最も低く、保育園母親との差が大きい。また、幼稚園父親に比べても低くなっている。次に、「親の言うことを聞く」という子育て観の平均点は、幼稚園父親で最も高く、とりわけ保育園母親との差が大きい。また、「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくする」という子育て観については、幼稚園父親で最も平均点が高かった。次に、保育園父親の平均点が高く、最も平均点の低い保育園母親との差が大きい。また、この項目では父親と母親の差が開いており、幼稚園、保育園のどちらにおいても、男女の差が大きく、母親同士では差がみられなかった点が興味深い。

図表3-2 保育園・幼稚園・母親・父親別にみた子育て観の平均

	全体 (n=5,871)	保育園		幼稚園	
		母親 (n=958)	父親 (n=689)	母親 (n=2,290)	父親 (n=1,934)
自分の気持ちをはっきり主張する(*)	3.49	3.48	3.50	3.48	3.51
得意なことをのぼす(***)	3.66	3.70	3.66	3.63	3.69
園のきまりや先生の言うことを聞く(*)	3.22	3.22	3.20	3.24	3.20
友達にやさしくする(**)	3.67	3.69	3.66	3.69	3.65
親のいうことを聞く(***)	3.15	3.10	3.16	3.11	3.20
男の子は男の子らしく女の子は女の子らしくする(***)	2.55	2.36	2.68	2.38	2.81

注)一元配置の分散分析により統計的有意差を検定
+p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001 ns=非有意

③属性との関連

親の属性と子育て観の関係をみるために、母親、父親別に一元配置の分散分析を行った。分析に使用した変数は、年齢、学歴、仕事形態、職種、年収である。平均に差がみられたものについて、以下に示していく。

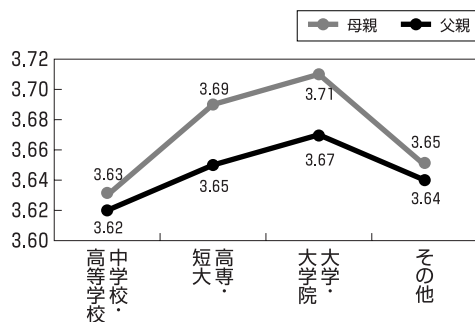
「自分の気持ちをはっきり主張する」という子育て観については属性による差がみられなかった。「得意なことをのぼす」という子育て観と学歴との関係については図表3-3に示した。母親では学歴による差がみられなかったが、父親の学歴では、学歴が高くなるほど平均が高くなっていることがわかる。「その他」には中学校卒が含まれるため、学歴が高いほど「得意なことをのぼす」ことを重要視しているといっていよいだろう。就業形態による差については図表3-4に示すとおりで、「自営業」や「自由業」では平均が高く、「無職・家事」では低くなっている。

「園のきまりや先生のいうことをきく」という項目では、母親の学歴と父親の学歴に差がみられ、どちらも学歴が高くなるほど、平均点が低くなっている(図表3-5)。つまり、学歴が高い親ほど、園のきまりや先生のいうことをきかなくてもよいと考えていることがわかる。次に、「友達にやさしくする」という子育て観でも、学歴によって差がみられた(図表3-6)。母親、父

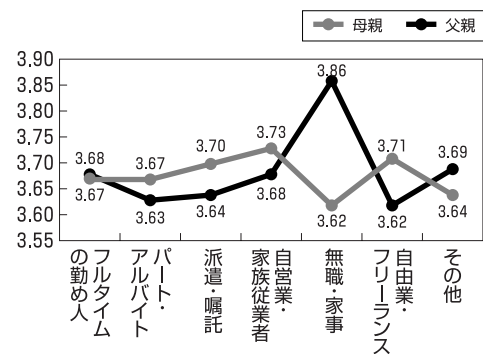
親ともに、学歴が高いほど平均点が低くなるという傾向がみられ、学歴の高い親の方が「友達にやさしくする」ことを重要視していないことがわかった。「親のいうことをきく」という子育て観については、父親の学歴ではあまり差がなく、母親の学歴の方で差が見られた（図表3-7）。興味深いことに、父親は学歴に関係なく、「親のいうことをきく」という子育て観を持っているのに対し、母親では学歴が高くなるほど親のいうことをきかなくてもよいと考えている。

最後に、「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく」という子育て観については、学歴、就業形態、年収によって平均の差がみられた。学歴については、父親、母親ともに学歴が低いほど平均点が高くなり、学歴の高い親の方がジェンダーに縛られない子育て観を持っていることがわかる（図表3-8）。就業形態については、図表3-9に示すとおりで、母親では「パート・アルバイト」と「自営業・家族従業者」が高く、「フルタイムの勤め人」、「派遣・嘱託」、「自由業・フリーランス」が低い。父親では、母親にくらべて差は少ないものの、同様の傾向がみられ、「自営業・家族従業者」が最も高く、「フルタイムの勤め人」や「自由業・フリーランス」で低くなっている。年収については、母親では年収が高くなるほど、平均値が低くなることがわかる（図表3-10）。つまり、学歴が高く、フルタイム勤務や自由業・フリーランスで働いており、年収が高い親はジェンダー規範には否定的であるということがいえるだろう。

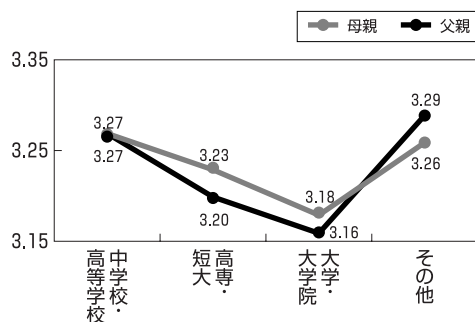
図表3-3 「得意なことをのぼす」
×学歴



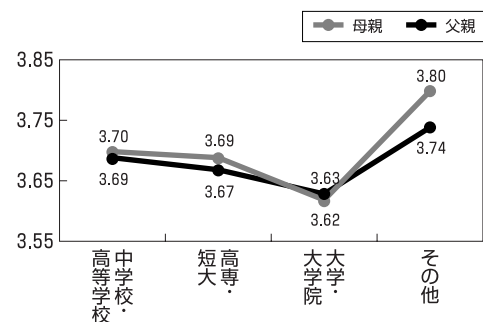
図表3-4 「得意なことをのぼす」
×就業形態



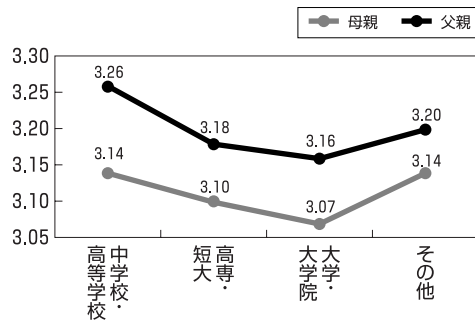
図表3-5 「園の決まりや先生のいうことをきく」×学歴



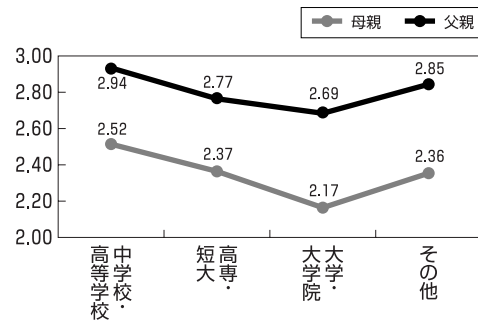
図表3-6 「友達にやさしくする」
×学歴



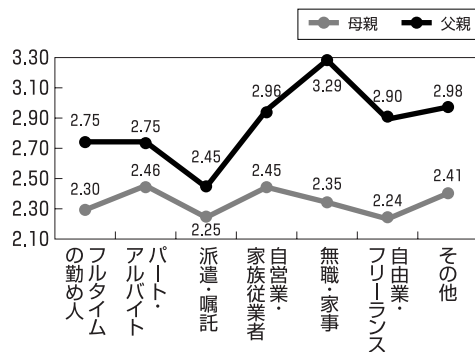
図表3-7 親の言うことをきく
×学歴



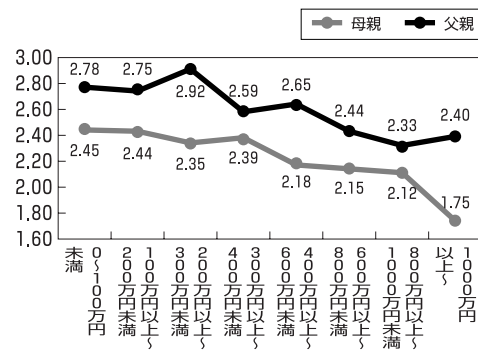
図表3-8 男の子は男の子らしく女の子は女の子らしくする×学歴



図表3-9 男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくする×就業形態



図表3-10 男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくする×年収



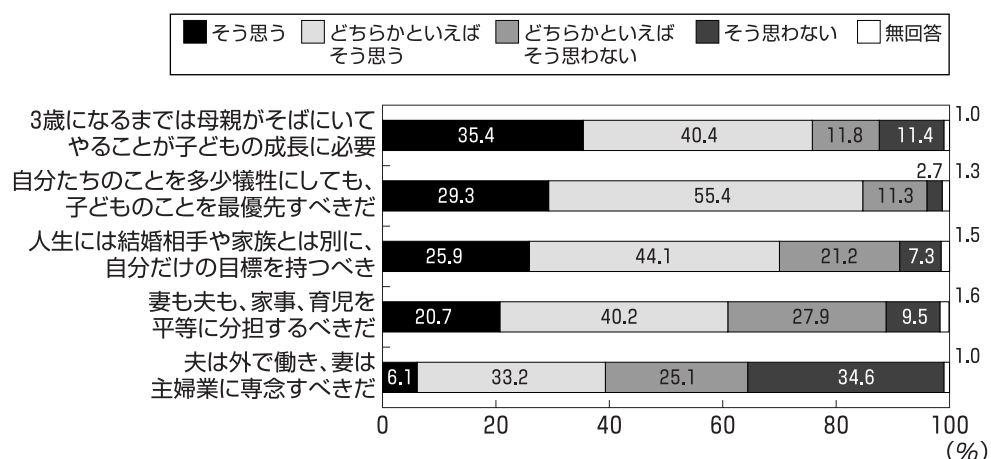
(2) 家族規範意識

①全体的な傾向

次に、家族規範意識を示す4項目について、「そう思う」から「そう思わない」までの4段階で回答してもらった結果が図表3-11である。「子どもが3歳になるまでは母親がそばにいてやるのが子どもの成長に必要」という項目では、35.4%が「そう思う」と回答しており、40.4%は「どちらかといえばそう思う」と回答している。いわゆる3歳児神話については、「肯定」する親が全体の7割以上を占めることがわかった。続いて、「自分たちのことを多少犠牲にしても、子どものことを最優先すべきだ」という項目も支持が多く、29.3%が「そう思う」、55.4%が「どちらかといえばそう思う」と回答している。

一方、「人生には結婚相手や家族とは別に、自分だけの目標を持つべき」という規範については、25.9%が「そう思う」、44.1%が「どちらかといえばそう思う」と回答しており、両方をあわせると約7割の親に支持されていることがわかる。性別役割分業については、「妻も夫も、家事、育児を平等に分担すべきだ」という項目に「そう思う」と回答した割合は20.7%、「どちらかといえばそう思う」の割合は40.2%であり、約6割の親は平等に分担すべきだと考えている。また、「夫は外で働き、妻は主婦業に専念すべきだ」という項目については、肯定する割合（「そ

図表3-11 家族規範意識



う思う」と「どちらかといえば思う」を足した割合）が39.3%、否定する割合が約59.7%を占めており、家事・育児の分担よりも肯定する割合が若干低くなっている。

②保育園・幼稚園・母親・父親のちがい

子育て観と同様に、保育園、幼稚園、母親、父親別に家族規範意識の平均を比較した。「そう思う」を4点、「どちらかといえばそう思う」を3点、「どちらかといえはそう思わない」を2点、「そう思わない」を1点とし、その平均点を保育園・幼稚園・母親・父親別に示したものが、図表3-12である。「妻も夫も家事・育児を平等に分担すべきだ」と「人生には結婚相手や家族とは別に、自分だけの目標を持つべき」という項目は回答を反転し、平均が高いほど伝統的な規範意識を持つことを示している。

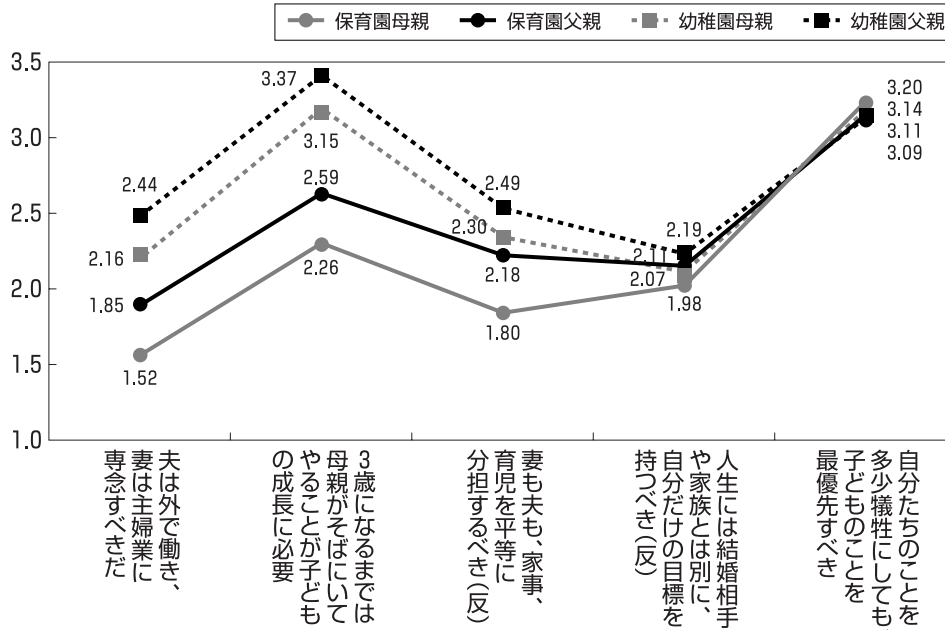
性別役割分業や3歳児神話に関する規範については、一貫して幼稚園父親が最も高く、幼稚園母親、保育園父親、保育園母親の順に低くなる傾向がみられた。伝統的な性役割を志向する幼稚園父親と、志向しない保育園母親の差が最も大きい。しかし、「人生には結婚相手や家族とは別に、自分だけの目標を持つべき」という個人化志向を示す規範については、順序が入れ替わり、幼稚園父親の次に保育園父親が高くなっている。自己犠牲規範に関しては、保育園、幼稚園、母親、父親の差があまりみられなかった。

③属性との関連

家族規範と属性との関連をみるために、母親、父親別に一元配置の分散分析を行った。分析に使用した変数は、年齢、学歴、仕事形態、職種、年収である。平均に差がみられたものについて、以下に示していく。

「夫は外で働き、妻は主婦業に専念すべきだ」という項目については、「中学校・高等学校」卒と「高専・短大」卒ではあまり差がなく、いずれも父親の平均値が母親を上回っている。父親の平均値は学歴による差がほとんどないが、母親では、大卒以上の平均値が大幅に減少し、大卒以上の父親との差が最も大きくなっている。母親、父親ともに大卒以上の夫婦では、意識のずれが大きいといえる。就業形態による差については図表3-14に示すとおりで、母親、父親ともに

図表3-12 保育園・幼稚園・母親・父親別にみた家族規範意識の平均



「無職・家事」が最も高く、「フルタイムの勤め人」が最も低い。職種別にみた差については図表3-15に示すとおりである。

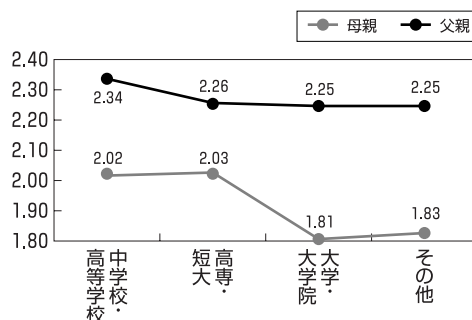
次に、「子どもが3歳になるまでは母親がそばにいてやるべきことが子どもの成長に必要な」という規範については、学歴、就業形態、職種によって差がみられた。父親では、学歴による差があまりみられず、一貫して3歳までは母親が育てるべきと考える傾向がみられるが、母親では「高専・短大」卒の平均値が最も高く、「大学・大学院」卒が最も低いという違いがみられる（図表3-16）。就業形態については、母親で「フルタイムの勤め人」の平均値がとりわけ低く、「無職・家事」が最も高くなっている（図表3-17）。職種による差は図表3-18に示すとおりで、母親では「事務職・営業職」や「専門職・技術職」の平均点が低く、農林漁業作業員では高い。仕事を持つ母親においても、職種によって平均点に差があることに注意が必要と思われる。

「妻も夫も、家事、育児を平等に分担すべきだ」という規範意識については、学歴、就業形態、職種、年収によって差がみられた。学歴による差は図表3-19に示すとおりで、母親では「中学校・高等学校」卒、「高専・短大」卒、大卒以上の順に低くなる。就業形態については、母親では「フルタイムの勤め人」が最も高く、「無職・家事」が最も低い。父親では、「無職・家事」の平均値が最も高いことは興味深い（図表3-20）。職種については図表3-21に示すとおりで、母親では「専門職・技術職」や「事務職・営業職」、それに加えて「農林漁業作業員」が高くなっている。父親では「専門職・技術職」と「農林漁業作業員」が高くなっている。年収の差は図表3-22に示した。母親は年収が上がるほど、分担規範が強まるが、800万円を超えると平均値が低くなる。父親の平均値はほぼ横ばいで、あまり差がみられなかった。

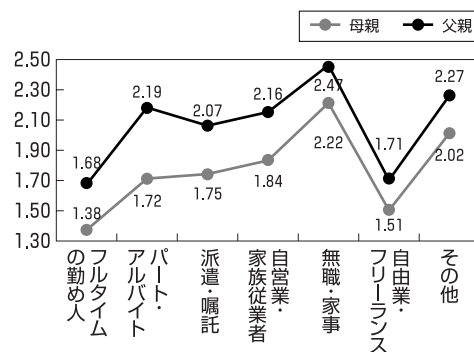
「人生には結婚相手や家族とは別に、自分だけの目標を持つべき」については、父親では、学歴による差があまりみられないが、母親では、学歴が高くなるほど平均値も高くなる（図表3-

23)。就業形態による差は図表3-24に示した。父親の「無職・家事」がとりわけ高くなっている。「自分たちのことを多少犠牲にしても、子どものことを最優先すべきだ」母親、父親ともに同じような傾向があり、「高専・短大」卒が最も高く、「中学校・高等学校」卒、「大学・大学院」卒の順に低くなる（図表3-25）。

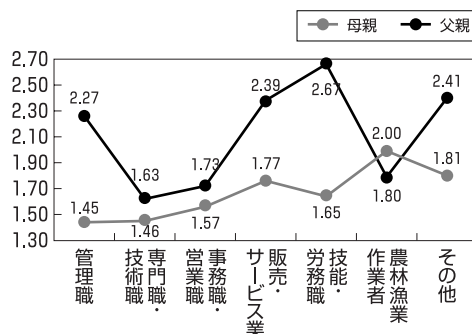
図表3-13 「夫は外、妻は主婦業」
×学歴



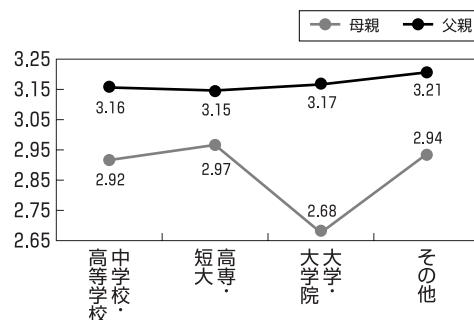
図表3-14 「夫は外、妻は主婦業」
×就業形態



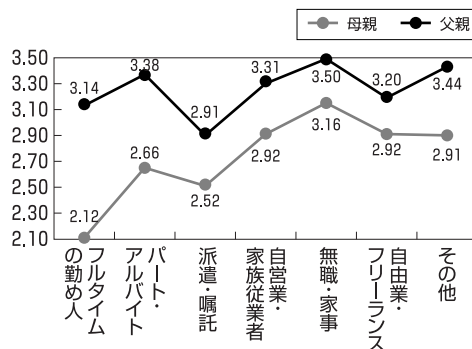
図表3-15 「夫は外、妻は主婦業」
×職種



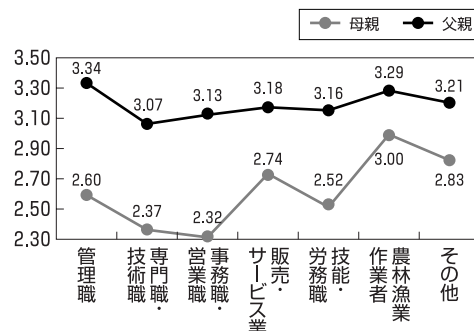
図表3-16 「3歳までは母親」
×学歴



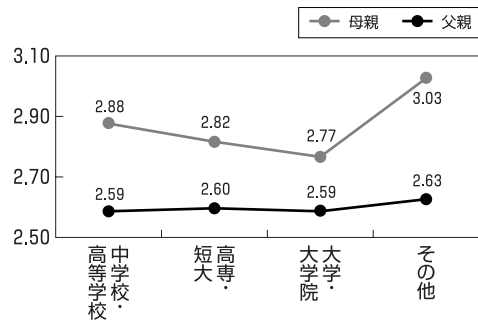
図表3-17 「3歳までは母親」
×就業形態



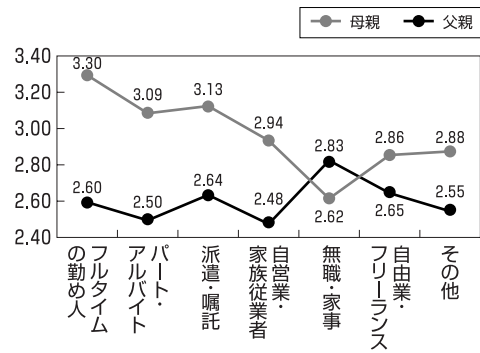
図表3-18 「3歳までは母親」
×職種



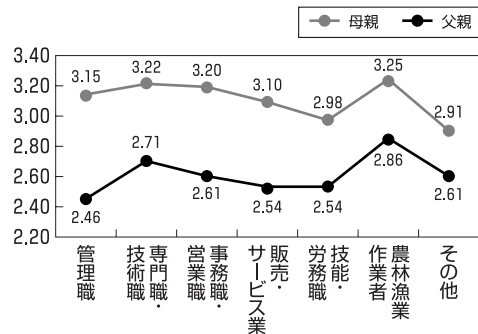
図表3-19 「家事・育児を分担すべき」
×学歴



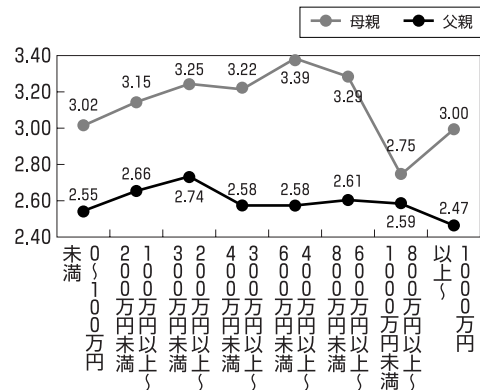
図表3-20 「家事・育児を分担すべき」
×就業形態



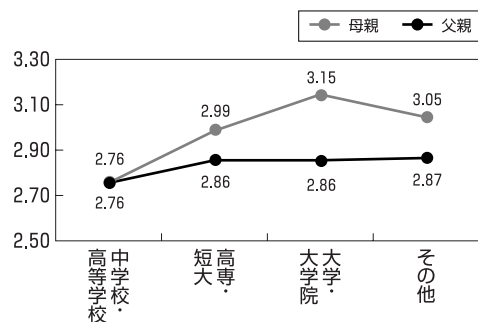
図表3-21 「家事・育児を分担すべき」
×職種



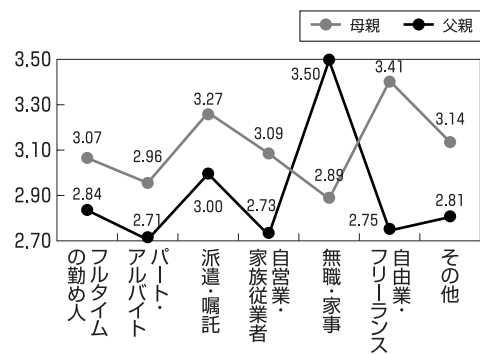
図表3-22 「家事・育児を分担すべき」
×年収



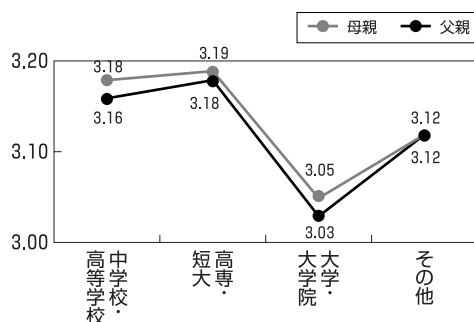
図表3-23 「自分の目標を持つべき」
×学歴



図表3-24 「自分の目標を持つべき」
×就業形態



図表3-25 「自分を犠牲にすべき」
×学歴



2. 育児不安と子育て観・家族規範

(1) 子育て観と育児不安

これまでの分析では、保護者のもつ子育て観や家族規範意識の現状と、属性の比較を行ってきた。それでは、こうした意識と育児不安の間にはどのような関連があるのだろうか。

この節では両者の関係に焦点をあてた分析を行う。子育て観を示す各項目と、育児不安との相関係数を図表3-26、図表3-27に示した。

母親では、いずれの項目においても、育児不安との間に統計的に有意な関連性がみられなかった。一方、父親では、「得意なことをのぼす」という子育て観を持つ父親は、育児不安が低いという結果がみられた。また、「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく」という子育て観を持つ程、育児不安が高まる。

図表3-26 育児不安と子育て観の相関(母親)

	自分の気持ちをはっきり主張する	得意なことをのぼす	園のきまりや先生のいうことをきく	友達にやさしくする	親のいうことを聞く	男の子は男の子らしく女の子は女の子らしくする
相関係数	0.014	0.002	0.001	-0.03	0.012	0.009
有意確率(両側)	0.444	0.91	0.938	0.091	0.487	0.627

*5%水準で有意(両側)

**1%水準で有意(両側)

図表3-27 育児不安と子育て観の相関(父親)

	自分の気持ちをはっきり主張する	得意なことをのぼす	園のきまりや先生のいうことをきく	友達にやさしくする	親のいうことを聞く	男の子は男の子らしく女の子は女の子らしくする
相関係数	0.022	-0.059(**)	0.017	0.005	0.017	.062(**)
有意確率(両側)	0.269	0.004	0.055	0.955	0.126	0.001

*5%水準で有意(両側)

**1%水準で有意(両側)

(2) 育児不安と家族規範

次に行く育児不安と家族規範の相関を調べたものが図表3-28と図表3-29である。母親で、育児不安と関連性がみられたのは、以下の3つの項目である。まず、「妻も夫も、家事・育児を平等に分担すべき」という項目と育児不安の間には正の相関があり、分担すべきであると考えている母親の方で、育児不安が高くなっている。次に「人生には結婚相手や家族とは別に自分だけの目標を持つべき」という個人化志向と育児不安の間にも正の相関がみられた。これは、自分だけの目標を持つべきと考えている母親の方が、育児不安も高いという結果を示している。育児不安に関する既存研究からは、自分の世界を持っている場合に、育児不安が軽減されるという知見が得られている（牧野1982）。自分の世界を持ちたいと思いつつも、それが実現できていない場合に育児不安が高くなるものと推測される。最後に「自分たちのことを多少犠牲にしても、子どものことを最優先すべき」という項目では、「最優先すべき」と考えている母親の方で、育児不安が低くなる傾向がみられた。

一方、父親の場合、関連がみられたのは「妻も夫も、家事・育児を平等に分担すべき」という項目のみである。母親の場合と同様に、家事・育児を分担すべきと考えている父親の方が、育児不安が高くなっている。

図表3-28 育児不安と家族規範の相関（母親）

	夫は外で働き、妻は主婦業に専念すべきだ	3歳になるまでは母親がそばにいてやるのが子どもの成長に必要	妻も夫も、家事、育児を平等に分担すべき	人生には結婚相手や家族とは別に、自分だけの目標を持つべき	自分たちのことを多少犠牲にしても、子どものことを最優先すべき
相関係数	0.03	0.02	0.12 (**)	0.04 (*)	-0.04 (*)
有意確率 (両側)	0.11	0.37	0.00	0.04	0.01

*5%水準で有意 (両側)

**1%水準で有意 (両側)

図表3-29 育児不安と家族規範の相関（父親）

	夫は外で働き、妻は主婦業に専念すべきだ	3歳になるまでは母親がそばにいてやるのが子どもの成長に必要	妻も夫も、家事、育児を平等に分担すべき	人生には結婚相手や家族とは別に、自分だけの目標を持つべき	自分たちのことを多少犠牲にしても、子どものことを最優先すべき
相関係数	0.01	-0.04 (*)	0.07 (**)	0.03	0.03
有意確率 (両側)	0.79	0.43	0.00	0.19	0.10

*5%水準で有意 (両側)

**1%水準で有意 (両側)

3. 負担感と生活満足度

(1) 家事・育児と仕事の負担感

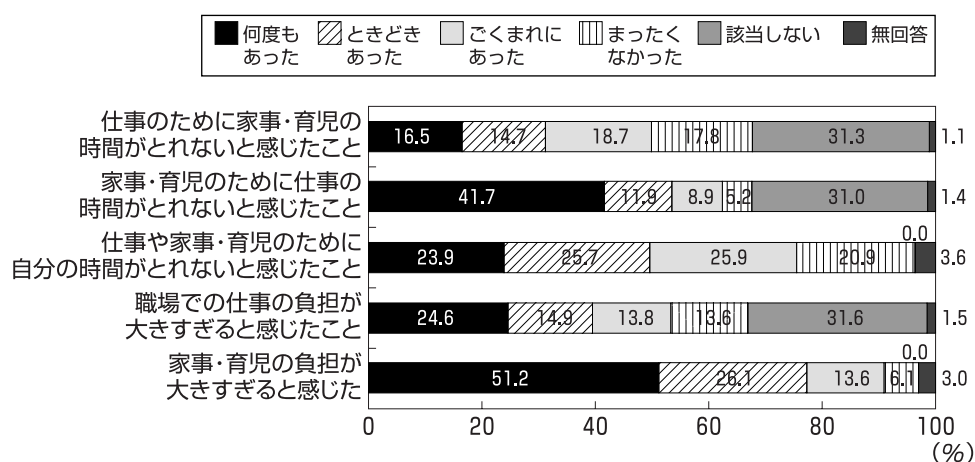
①全体的傾向

第3節では、保護者の家事・育児と仕事の負担感の現状と属性による差について分析を行った。図表3-30は、家事・育児と仕事の負担感を示す5項目について、「何度もあった」から「まったくなかった」までの4段階で回答してもらった結果を示したものである。全体において、負担感が最も高かったのは「家事・育児の負担」であり、「家事・育児の負担が大きすぎると感じた」という項目に対し、半数以上の親が「何度もあった」と回答している。

仕事と家事・育児の両立に対するストレスでは、「家事・育児のために仕事の時間がとれないと感じたこと」の方が、「仕事のために家事・育児の時間がとれないと感じたこと」よりも「何度もあった」という回答が多かった（前者は41.5%、後者は16.5%）。

「仕事や家事・育児のために自分の時間がとれないと感じたこと」では、「何どもあった」という回答が23.9%、「ときどきあった」という回答が25.7%あり、両方をあわせると半数近くに上る。また、「職場での負担が大きすぎると感じたこと」については、24.6%の親が「何どもあった」と回答している。全体として、乳幼児を育てる親は、負担感を抱えていることがわかる。

図表3-30 家事・育児と仕事の負担感

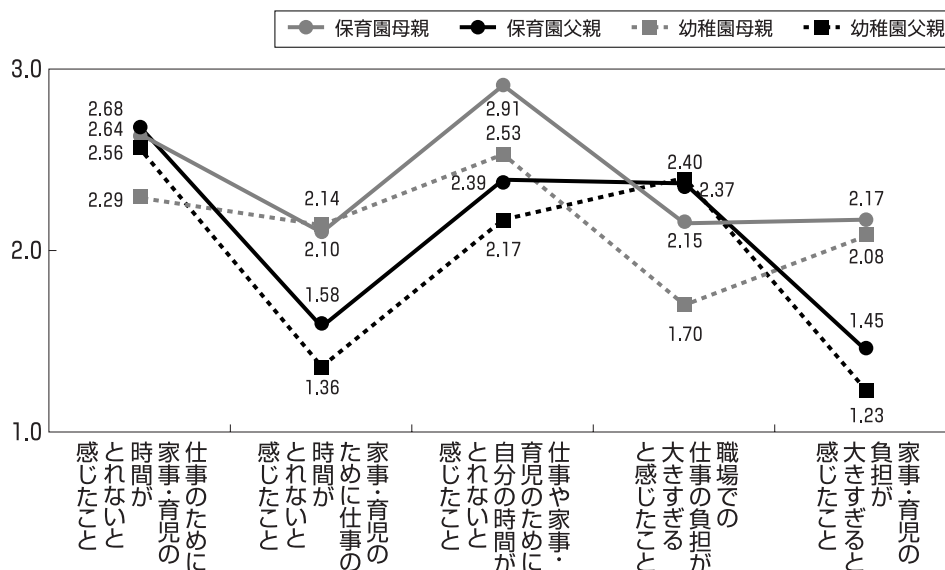


②保育園・幼稚園・母親・父親のちがい

子育て観や家族規範と同様に、保育園、幼稚園、母親、父親別に家族規範意識の平均を比較した（図表3-31）。「何どもあった」を4点、「ときどきあった」を3点、「ごくまれにあった」を2点、「まったくなかった」を1点とした。

「仕事のために家事・育児の時間がとれないと感じたこと」の平均点は、保育園父親、保育園母親、幼稚園父親で高いが、幼稚園母親はやや低い。次に、「家事・育児のために仕事の時間がとれないと感じたこと」では、保育園母親と幼稚園母親で高く、保育園父親、幼稚園父親の順に低い。保育園母親は全体的に負担感が高いが、中でも最も負担感が高い項目は「仕事や家事・育児のために自分の時間がとれないと感じたこと」というものである。保育園母親は仕事と家事・

図表3-31 家事・育児と仕事の負担感



育児の二重負担で自分の時間が持てないという現状があるのだろう。

「職場での仕事の負担が大きすぎると感じたこと」では、幼稚園父親と保育園父親の負担感が高く、仕事中心の生活を送る父親達の姿がうかがえる。「家事・育児の負担が大きすぎると感じた」という項目では、母親と父親の間の差が大きく、母親は保育園、幼稚園を問わず高い負担感を感じている一方で、父親の負担感は低いものとなっている。全体として、仕事、家事・育児ともに時間が不足し、負担感が高いのは保育園母親であるということが明らかになった。

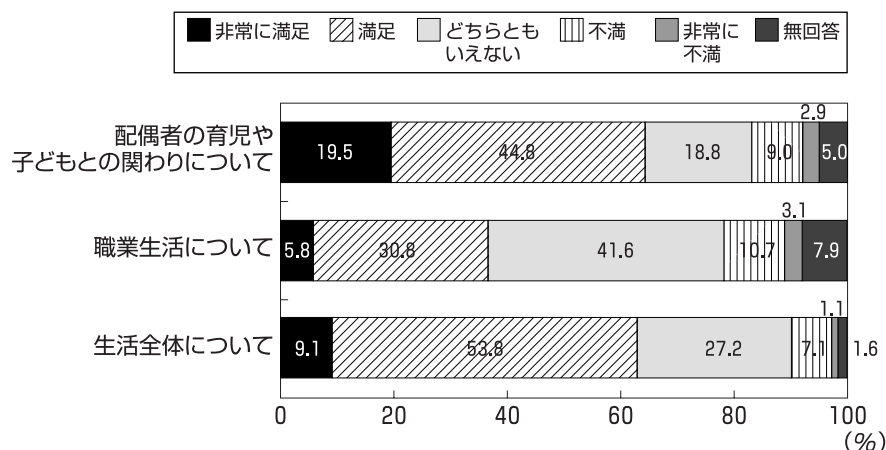
(2) 生活満足度

①全体的傾向

図表3-32は、生活満足度を示す3項目について、「非常に満足」から「非常に不満」までの5段階で回答してもらった結果を示したものである。

3項目のうち、最も満足度が高かったのは「配偶者の育児や子どもとのかかわりについて」であり、19.5%が「非常に満足」、44.8%が「満足」と回答し、6割以上の親は、配偶者の育児参加に満足しているという結果になった。次いで、「生活全体について」の満足度も、「非常に満足」が9.1%、「満足」が53.8%で6割以上であった。満足している度合いが最も低かったのは「職業生活について」であり、「非常に満足」が5.8%、「満足」が30.8%となっている。

図表3-32 生活満足度

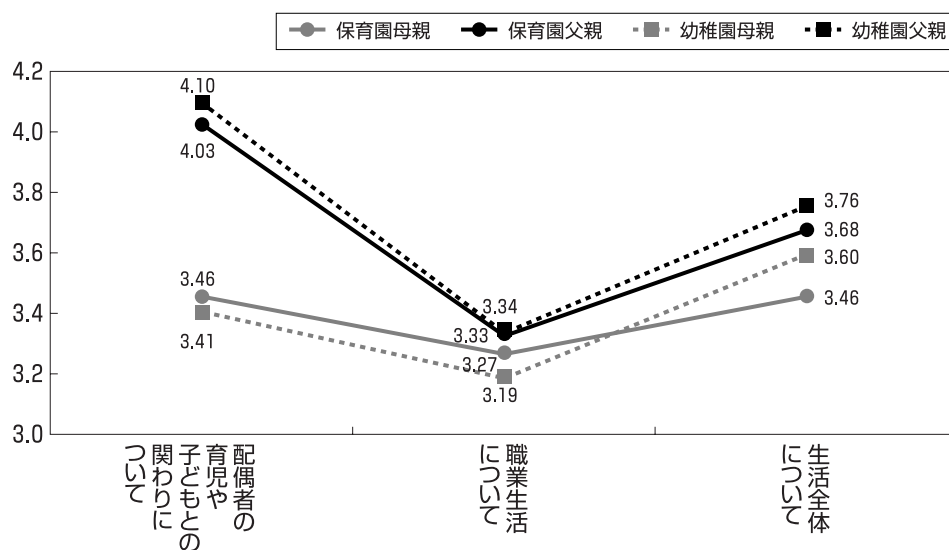


②保育園・幼稚園・母親・父親の違い

負担感と同様に、生活満足度の平均を保育園、幼稚園、母親、父親別に比較した。「非常に満足」を5点、「満足」を4点、「どちらともいえない」を3点、「不満」を2点、「非常に不満」を1点とし、それぞれの平均点を示したものが図表3-33である。図をみてわかるように、概して、父親の満足度は高く、母親の満足度は低い。

一元配置の分散分析を行った結果では、「配偶者の育児や子どもとの関わり」に関する満足度において、父親、母親ともに保育園と幼稚園の差がみられない。「職業生活について」の満足度は、保育園父親や幼稚園父親、保育園母親ではあまり差がないが、幼稚園母親だけが低くなっている。「生活全体について」の満足度は、幼稚園父親が最も高く、続いて保育園父親、幼稚園母親、保育園母親の順に低くなる。とりわけ保育園母親の低さが際立っていることがわかった。

図表3-33 生活満足度



4. 園のサポートと負担感・生活満足度

(1) 園のサポートと負担感

最後に4節では、担任の先生の対応を園のサポートと捉え、負担感との関係性を探った（園のサポートの得点化については7章を参照）。図表3-34と図表3-35は、園のサポートと負担感の各項目との相関係数を示したものである。

母親では、「職場での仕事の負担感」以外の項目において、負担感と園のサポートの間には正の相関が見られた。つまり、園のサポートが多い程負担感は軽減されるということが明らかになった。父親では、園のサポートと負担感の間に有意な関係性はみられなかった。

図表3-34 園のサポートと負担感(母親)

	仕事のために家事・育児の時間がとれないと感じたこと	家事・育児のために仕事の時間がとれないと感じたこと	仕事や家事・育児のために自分の時間がとれないと感じたこと	職場での仕事の負担が大きすぎると感じたこと	家事・育児の負担が大きすぎると感じたこと
相関係数	.098 (**)	.077 (*)	.067 (**)	0.03	.083 (**)
有意確率(両側)	0.00	0.02	0.00	0.38	0.00

*5%水準で有意(両側)

**1%水準で有意(両側)

図表3-35 園のサポートと負担感(父親)

	仕事のために家事・育児の時間がとれないと感じたこと	家事・育児のために仕事の時間がとれないと感じたこと	仕事や家事・育児のために自分の時間がとれないと感じたこと	職場での仕事の負担が大きすぎると感じたこと	家事・育児の負担が大きすぎると感じたこと
相関係数	0.05	0.01	0.08	0.05	0.01
有意確率(両側)	0.32	0.78	0.16	0.33	0.87

*5%水準で有意(両側)

**1%水準で有意(両側)

(2) 園のサポートと生活満足度

負担感と同様に、生活満足度と園のサポートの関係についても分析を行った。母親では、図表3-36に示すとおり、園のサポートと生活満足度は正の関係にあり、園のサポートが高いほど、満足度も高くなるという傾向性がみられた。

父親については、図表3-37に示したように、「配偶者の育児や子どもとの関わりについて」と「生活全体について」の満足度との間に正の相関がみられる。「職業生活について」の満足度との間には関係性がみられなかった。

図表3-36 園のサポートと生活満足度(母親)

	配偶者の 育児や 子どもとの 関わりについて	職業生活 について	生活全体 について
相関係数	.09 (**)	.12 (**)	.12 (**)
有意確率(両側)	0.00	0.00	0.00

*5%水準で有意(両側)

**1%水準で有意(両側)

図表3-37 園のサポートと生活満足度(父親)

	配偶者の 育児や 子どもとの 関わりについて	職業生活 について	生活全体 について
相関係数	.18 (**)	0.03	0.13 (*)
有意確率(両側)	0.00	0.61	0.02

*5%水準で有意(両側)

**1%水準で有意(両側)

5. まとめ

(1) 親の持つ子育て観

親の持つ子育て観を示す7項目のうち、最も支持が高かったのは「友達に優しくする」というものであった。次に「得意なことをのぼす」や「自分の気持ちをはっきり主張する」などが支持されている。一方、「園のきまりや先生のいうことを聞く」「親のいうことを聞く」という子育て観はあまり支持されていなかった。また、「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく育てる」という子育て観は、重要であるとする親と、重要ではないとする親がほぼ同じ割合となっている。

これを、保育園母親、保育園父親、幼稚園母親、幼稚園父親にわけて考察した結果、「得意なことをのぼす」という子育て観については、保育園母親の支持が最も高く、幼稚園母親との差が大きいことがわかった。「親のいうことを聞く」という子育て観は、幼稚園父親の支持が高く、とりわけ保育園母親、幼稚園母親との差が大きい。「男の子は男の子らしく女の子は女の子らしく育てる」という子育て観については、幼稚園、保育園の差はあまりみられず、父親と母親の差が大きかった。

属性による比較では、概して学歴による差が大きかった。「得意なことをのぼす」という子育て観は、学歴が高くなるほど重要視している親が増える。一方「園のきまりや先生のいうことをきく」や「親のいうことをきく」などの項目では、学歴が高くなるほど、重要視していない傾向がみられた。学歴の高い親は、比較的「自律性」を重んじた子育て観を持つのに対し、学歴の低い親では「統制」による子育て観が支持されている。また、「友達にやさしくする」という子育て観でも、学歴が低いほど平均が高くなるという傾向があり、学歴の高い親の方が「友達にやさしくする」ことを重要視していない。「男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく」という

子育て観については、学歴が高く、フルタイム勤務や自由業・フリーランスで働いており、年収が高い親は否定的であるということがいえる。

(2) 家族規範意識

平成10年度の『厚生白書』において3歳児神話について、科学的に根拠がないと指摘されてから7年が過ぎた現在でも、こうした規範意識は根強く浸透している。家族規範意識については、いわゆる3歳児神話や、自己犠牲的な規範意識を持つ親が全体の7割以上を占めている。一方、「人生には結婚相手や家族とは別に、自分だけの目標を持つべき」という個人化を示す規範についても約7割の親に支持されていた。性別役割分業については、家事、育児の分担を約6割の親は平等に分担するべきだと考えている。また、否定する割合が約6割を占めており、家事・育児の分担の方がわずかながら肯定する割合が高くなっている。

性別役割分業や3歳児神話に関する規範については、一貫して幼稚園父親が最も伝統的であり、幼稚園母親、保育園父親、保育園母親の順に非伝統的になる傾向がみられた。伝統的な性役割を志向する幼稚園父親と、志向しない保育園母親の差が最も大きいといえる。しかし、「人生には結婚相手や家族とは別に、自分だけの目標を持つべき」という個人化志向を示す規範については、順序が入れ替わり、幼稚園父親の次に保育園父親が高くなっている。自己犠牲規範に関しては、保育園、幼稚園、母親、父親の差があまりみられなかった。

属性別の比較では、やはり学歴による差が大きく、とりわけ大卒の母親では性別役割分業規範を否定する割合が高くなっている。

(3) 負担感・生活満足度

家事・育児と仕事の負担感については、「家事、育児の負担が大きすぎると感じた」という項目に対して半数以上が当てはまると回答し、「家事、育児のために仕事の時間がとれないと感じた」という項目では4割以上が、「何度もあった」と回答している。子育て期の親が持つ「家事、育児」への負担感が高いといっていよう。

とりわけ負担感が高いのは保育園母親であり、仕事、家事・育児ともに時間が不足し、負担感が高いと回答している。生活に対する満足度についても、幼稚園母親、保育園父親、幼稚園父親に比べ、保育園母親の低さがきわだっている。「配偶者の育児や子どもの関わり」に対する満足度は、父親、母親ともに幼稚園と保育園の差はみられず、父親と母親の間の差が大きい。保育園母親については、負担感も高く、生活への不満も高いことから、こうした状況を少しでも軽減できるような、支援の方法を考えていかなければならないだろう。

(4) 園のサポート

負担感や満足度と園のサポートとの関係をみたところ、母親では園のサポートが多い場合に、職場での仕事の負担感を除くすべての負担感が低くなり、満足度は高まることがわかった。父親では、負担感との間には統計的に有意な関係性はみられないが、園のサポートが多い場合に、配偶者の育児や子どもとのかわりに対する満足度と生活全体に対する満足度が高くなる。つまり、園のサポートは親の負担感を軽減させ、生活に対する満足度を高める効果を持っている。さらに、

そうした効果は母親においてより顕著であるといえよう。

また、家族規範意識の分析から、「人生には結婚相手や家族とは別に、自分だけの目標を持つべき」と考えている親で、育児不安が高いことが明らかになった。保育園母親は、生活全般において負担感が高いことを既に指摘したが、中でも負担感が最も高い項目は「仕事や家事・育児のために自分の時間がとれないと感じたこと」というものである。保育園母親は、常に仕事と家事・育児の二重負担を抱え込み、自分の時間が持つことができないという現状があるのだろう。自分の世界を持ちたいと思いつつ、時間が持てないでいるというところに、育児不安を生じさせる背景があるのではないだろうか。今後は、こうした視点からの支援も必要と思われる。

参考文献

牧野カツコ, 1982, 「乳幼児を持つ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭教育研究所紀要』, 3: 34-56.

第4章 保育園・幼稚園の利用状況

本章では、保育園と幼稚園の利用状況を把握し、現代の子どもの園生活の一般的な姿を明らかにする。本章の課題は次の2点である。第一に保育サービスの利用状況を把握する。第二に子どもの生活時間を把握し、通園先や親の就労形態による違いを検討する。

1. 利用する保育サービス

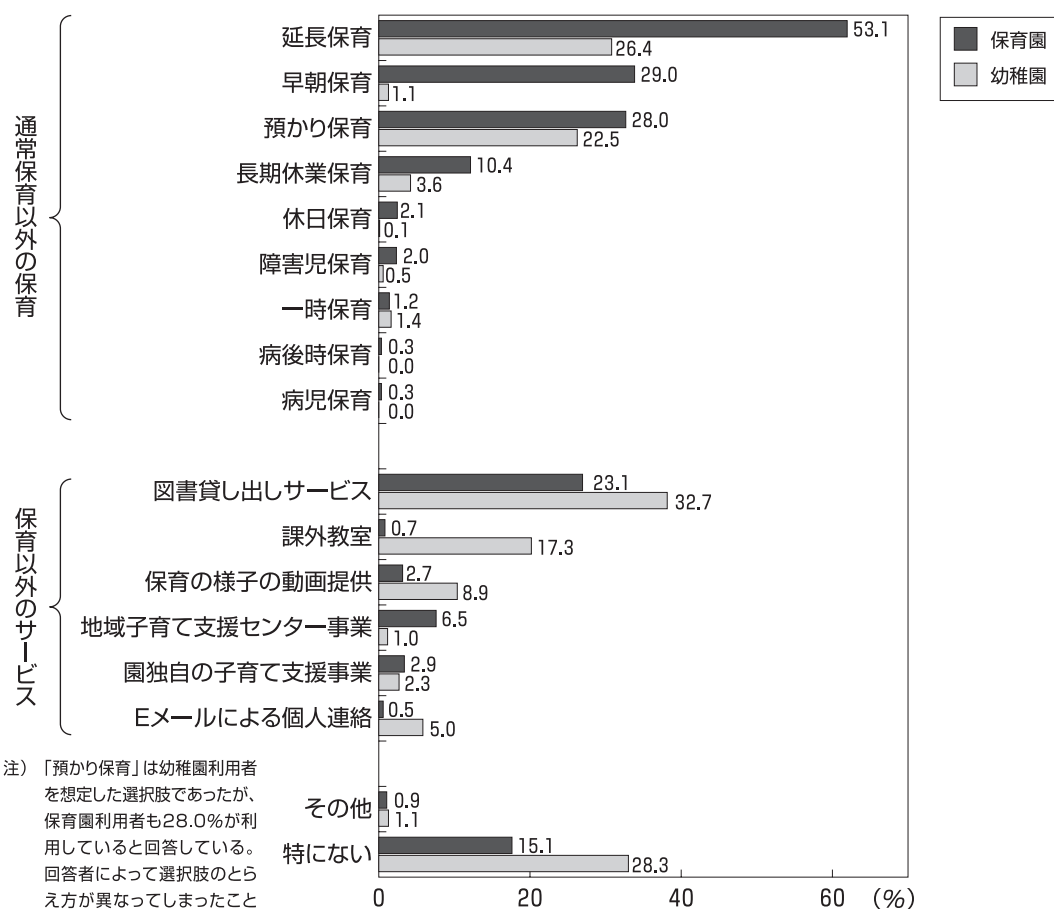
(1) 園で実施するサービスの利用

園で実施するサービスの利用についてたずねた結果が図表4-1である。通常保育以外の保育サービスについての利用をみると、保育園児の保護者では「延長保育」を利用する者が53.1%と半数以上を占める。幼稚園では「延長保育」、または「預かり保育¹」の利用者は3割弱である。

保育以外のサービスでは、「図書貸し出しサービス」の利用が多い。幼稚園では「課外教室」の利用が2割弱みられる。「保育の様子動画提供（保育の様子ビデオの貸し出しや映像のインターネット配信）」は保育園では利用者が3%に満たないが幼稚園では1割弱が利用している。

保育園では多種の保育サービスが利用され、幼稚園では保育以外のサービスが利用されている傾向が分かる。

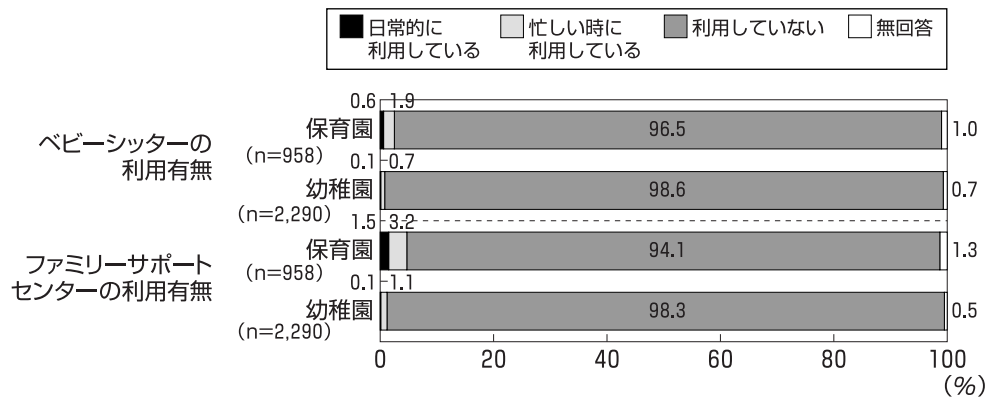
図表4-1 園で実施するサービスの利用



(2) 二重保育の利用状況

二重保育の利用状況について把握した結果が図表4-2である。ベビーシッターやファミリーサポートセンターを利用している親は少数である。いずれも保育園児の親のほうが利用している者の割合はやや高い。

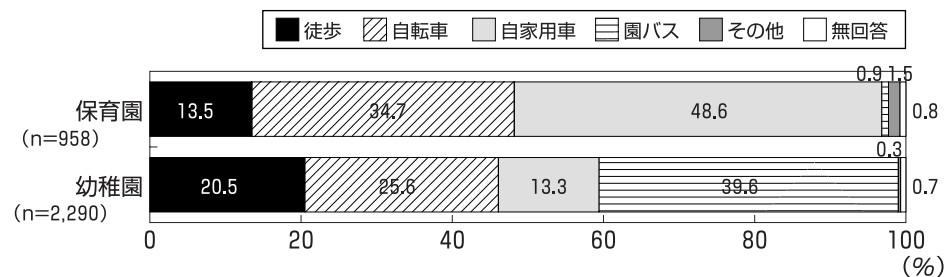
図表4-2 二重保育の利用状況



(3) 登園手段

登園手段は、保育園児では「自家用車」が最も多く、約半数を占める（図表4-3）。次いで「自転車」「徒歩」の順となっている。幼稚園児は「園バス」が4割弱で最多、次いで「自転車」「徒歩」「自家用車」の順である。保育園、幼稚園ともに徒歩は少数派である。この理由としては、園までの距離が近くても親が利便性を重視して徒歩以外の手段を使うことと、地域に存在する園数が少なく徒歩で通えないことの2点が考えられる。

図表4-3 登園手段



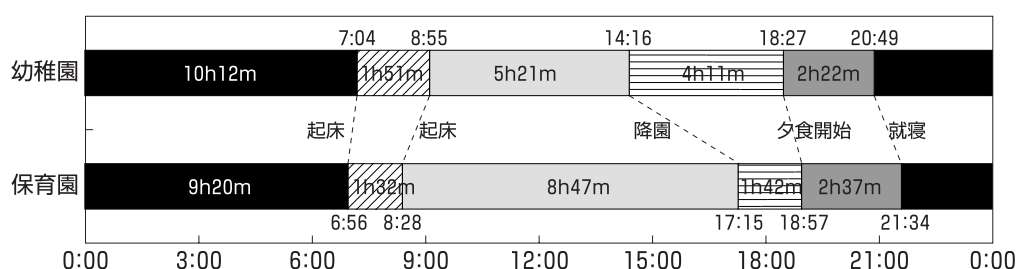
2. 子どもの生活時間

(1) 1日の生活時間

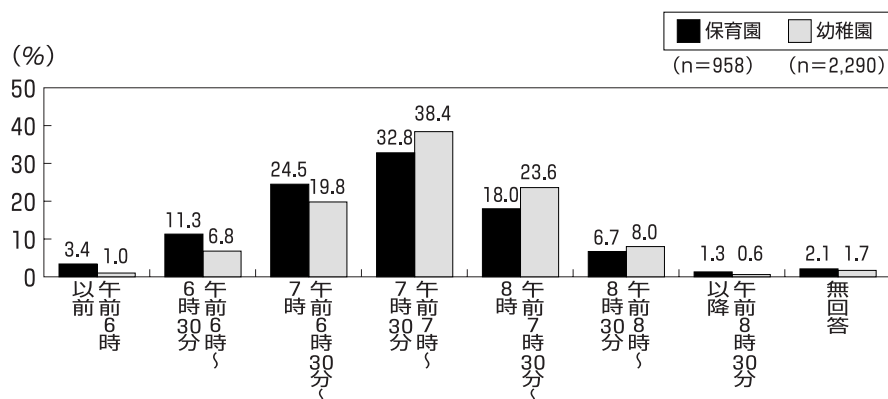
保育園児と幼稚園児の1日の主なタイムスケジュールを示したものが図表4-4である。保育園児は在園時間が長く、幼稚園児と比べると遅寝・早起きであることが分かる。

図表4-5は子どもの起床時刻の分布である。午前7時～7時半が最も多い。保育園児のほうが時間帯がやや早い傾向がみられる。子どもの登園時刻は、幼稚園児が9時前後に集中するのに対し、保育園児は午前8時以前～9時30分まで幅がある（図表4-6）。

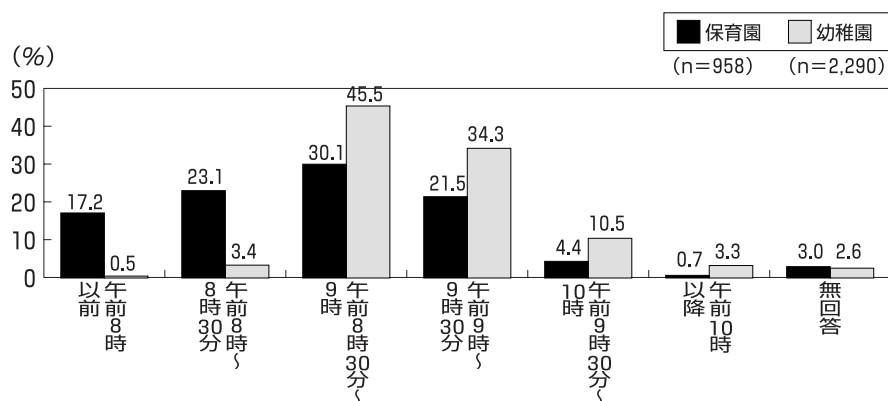
図表4-4 保育園児／幼稚園児の1日の主なタイムスケジュール（平均値）



図表4-5 子どもの起床時刻の分布



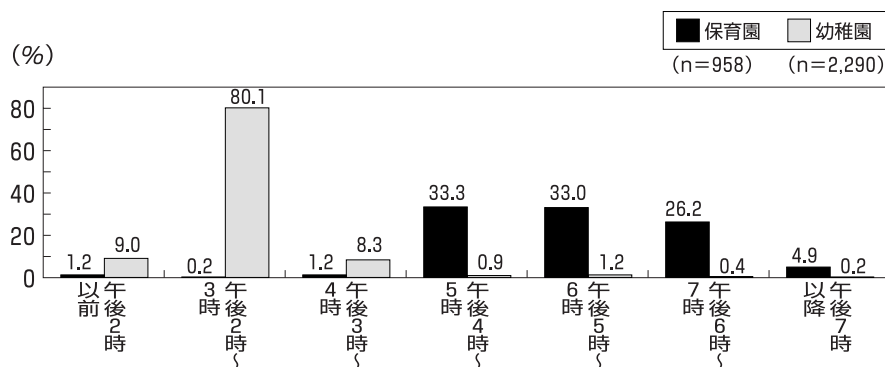
図表4-6 子どもの登園時刻の分布



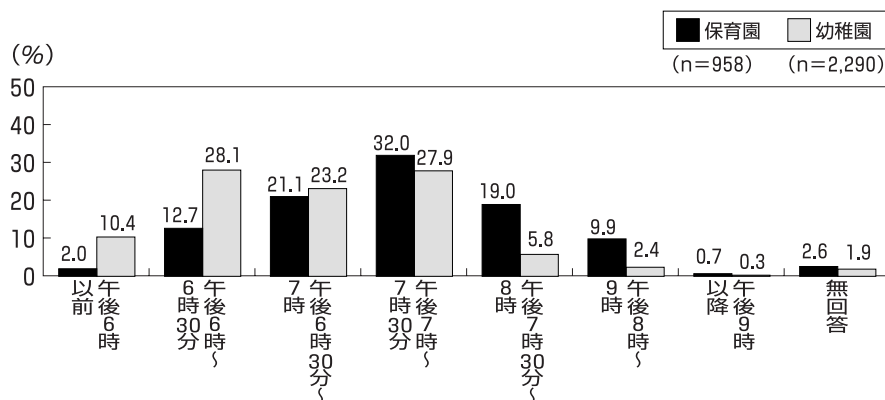
降園時刻も幼稚園児では午後2時台に8割が集中しているのに対し、保育園児は午後4時台、5時台、6時以降に約1/3ずつ分布している（図表4-7）。

子どもの夕食開始時刻は、幼稚園児は午後6時～7時30分、保育園児は午後6時30分～7時30分に多く分布しており、保育園児のほうが30分程度遅い傾向がみられる（図表4-8）。

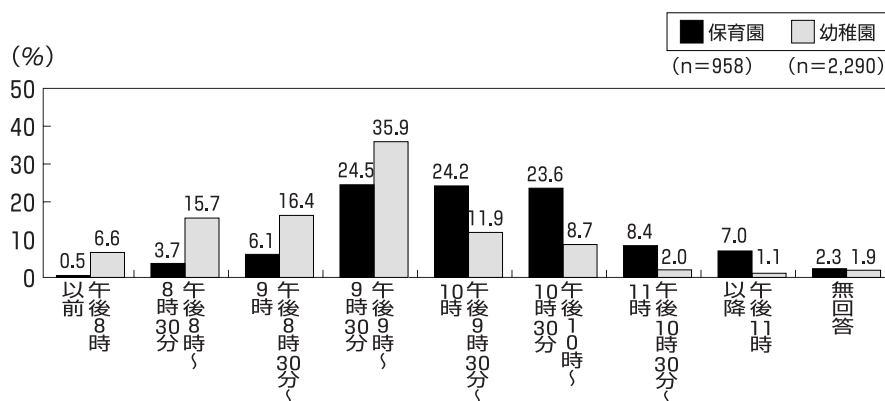
図表4-7 子どもの降園時刻の分布



図表4-8 子どもの夕食開始時刻の分布



図表4-9 子どもの就寝時刻の分布



子どもの就寝時刻は、幼稚園児は午後9時～9時30分に多く集中するのに対し、保育園児は午後9時～10時30分に約1/4ずつ分布する（図表4-9）。登園時間・降園時間の分布と同様、保育園児は幼稚園児に比べて生活時間帯に幅がある。

日本の子どもが遅寝であることが指摘されている。本調査でも0-6歳児全体の2割弱が午後10時以降に就寝するという結果が示された。特に保育園児については約4割が午後10時以降に就寝し、9時30分以前に就寝するほうが少数であることが分かり、遅寝の傾向は明らかである。

(2) 通園先・母親の就労形態別にみた生活時間

①母の就労形態

通園先や母の就労形態別による子どもの生活時間の違いをみる前に、母親の就労形態の分布を確認したい。図表4-10から保育園児の母親の約半数がフルタイム就労であることが分かる。幼稚園児の母親は大半が無職・家事であるものの、2割強は就労している。保育園利用者、幼稚園利用者双方を含めて末子年齢別にみると、末子が0-2歳の場合のほうが3歳以上よりもフルタイム就労率が高い。日本全国を対象とした調査結果と一致した結果である。子が3歳以上になるとパートタイムで再就職をする母親が増加することを示すと思われる。

図表4-10 通園先・末子年齢による母の就労形態

		通園先		末子年齢		(%)
就労形態	フルタイム・派遣・嘱託	保育園 N=958	幼稚園 N=2,290	0-2歳 N=852	3歳以上 N=2,276	合 計
	パート・アルバイト	46.0	2.5	25.5	11.7	15.4
	自営業・自由業・その他	35.0	13.1	17.3	20.3	19.5
	無職・家事	12.0	6.8	6.9	8.9	8.3
	合 計	6.9	77.6	50.4	59.1	56.7
合 計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

②通園先、母親の就労形態別タイムスケジュール

通園先、母親の就労形態別にタイムスケジュールの平均値を示したものが図表4-11である。母親が「フルタイム・派遣・嘱託」の場合に就寝時刻が最も遅いが、同時に起床時刻も早いことが分かる。幼稚園児のタイムスケジュールは、母親が「無職・家事」の場合とほぼ同一であり、

図表4-11 通園先、母親の就労形態別タイムスケジュール（平均値）

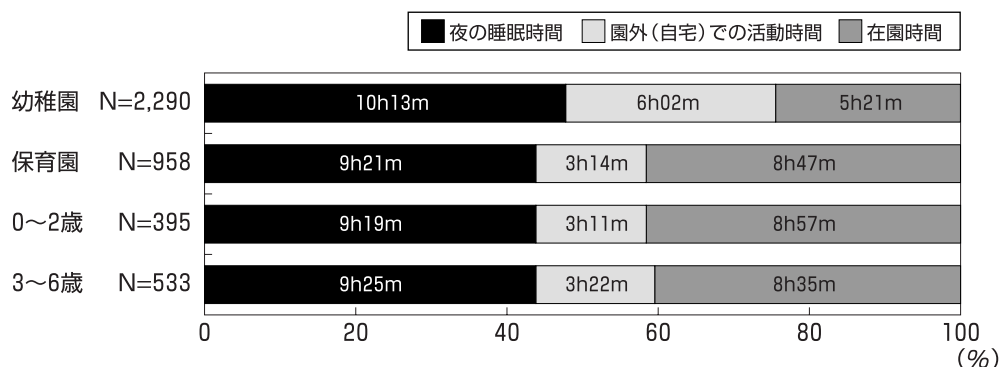
子どもの タイムスケジュール (時刻)	通園先				母親の就労形態				(時刻)
	幼稚園 N=2,290	保育園 N=958	保育園利用クラス		フルタイム・ 派遣・ 嘱託 N=485	パート・ アルバイト N=615	自営業・ 自由業・ その他 N=262	無職・ 家事 N=1,782	
			0-2歳 N=395	3-6歳 N=533					
起床時刻	7:04	6:57	6:47	7:01	6:48	7:06	7:10	7:03	
朝食(開始時刻)	7:32	7:23	7:14	7:26	7:13	7:32	7:36	7:31	
登園(園に着く時刻)	8:56	8:29	8:21	8:31	8:16	8:44	8:54	8:57	
降園(園を出る時刻)	14:18	17:16	17:19	17:07	17:29	15:51	15:35	14:16	
夕食(開始時刻)	18:29	18:59	18:56	19:00	19:03	18:44	18:47	18:27	
就寝時刻	20:51	21:36	21:27	21:36	21:33	21:18	21:15	20:50	

最も就寝時刻が早い。

③通園先別子どもの生活時間

タイムスケジュールの平均値から、夜の睡眠時間、園外（自宅）での活動時間、在園時間を算出した。その結果を通園先別に示したものが図表4-12である。午睡の時間を調査していないため、1日の合計睡眠時間は不明であるが、夜の睡眠時間については保育園児は幼稚園児より50分程度少ない。在園時間は幼稚園児では平均が5時間半弱、保育園児は8時間半前後である。0-2歳児のほうが、3-6歳児よりも在園時間が長い傾向がある。フルタイムでの就労率は0-2歳児の母

図表4-12 通園先別子どもの生活時間（平均値）

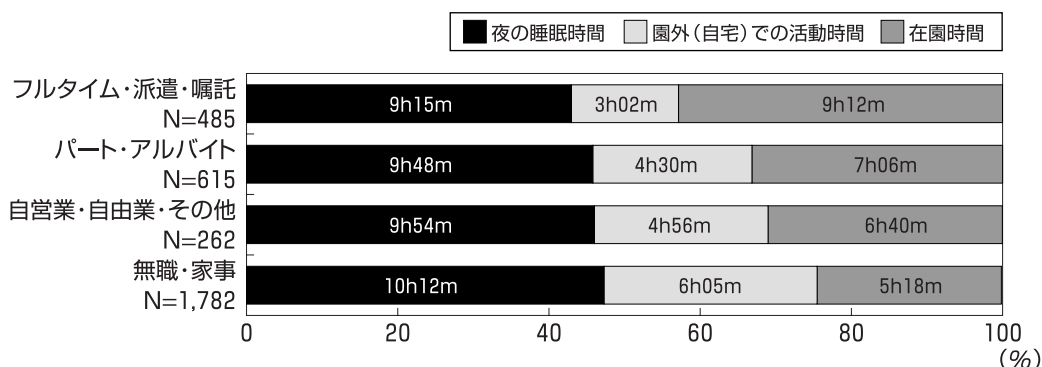


親のほうが高いことを反映していると考えられる。

④母親の就労形態別子どもの生活時間

母親の就労形態別に子どもの生活時間を示したものが図表4-13である。母親の就労形態により在園時間がはっきりと異なり、母親がフルタイム就労の場合は在園時間の平均が9時間以上に及ぶ。在園時間の長さに応じて、親が子どもと接する時間に相当すると考えられる園外（自宅）での活動時間は減少し、母親が無職・家事の場合は約6時間であるがフルタイム就労の場合はそ

図表4-13 母親の就労形態別子どもの生活時間（平均値）



の半分の約3時間である。

3. まとめと考察

この章では保育園・幼稚園に通う子どもの生活の様子を実態面から把握した。

保育園児は半数以上が延長保育を利用しており、在園時間も平均で8時間47分と長い。またベビーシッターやファミリーサポートセンターの利用者は極めて少数であり、二重保育は一般的ではなかった。このことは保育園児にとって保育園が子どもの生活の場として重要な位置を占めているということを示しているだろう。意外にも体力のある3歳児以上よりも0-2歳のほうが平均的な保育時間は長かった。乳児のための保育環境を丁寧に整える必要性を感じさせられる結果である。

幼稚園でも延長保育や預かり保育を実施する園が増えているが、利用者は3割弱であり在園時間の平均は5時間21分と保育園と3時間以上の差があった。利用されているサービスは、保育サービスよりも、図書の貸し出しや課外教室など保育以外のサービスが多い傾向がみられた。

登園手段は保育園児、幼稚園児ともに自動車が半数を占め、次いで自転車が多かった。毎日、徒歩以外の手段で通園することにより、子どもは乗り物に大人しく座ることを身につけてゆくと考えられる。子どもの運動不足が懸念される現在、目的地まで自分の足で歩く機会を意識的に設ける必要があることを感じさせられる結果であった。

生活時間をみると幼稚園児は登降園が特定の時間帯に集中しているが、保育園児は登園時間帯や降園時間帯に幅があった。2章では幼稚園児の母親では同じ園の保護者と話をする機会が平均週4回であるのに対し、保育園児の母親は週2回という結果が示された。登降園の時間の違いが、保護者が互いに顔を合わせる機会の多寡に結びついていることが分かる。保護者同士で話をする時間の長さは捉えていないが、子育ての悩みなどを保護者同士の会話で解決する機会は、保育園の保護者のほうが少ないといえるだろう。

また保育園児は、登降園時間のばらつきに対応するかのように就寝時刻や起床時刻にもばらつき、言い換えると家庭による差が大きいことが分かった。保育園では家庭による生活リズムの違いに対応せざるを得ない状況に置かれていることがうかがわれた。

全般的に保育園児は就寝時刻が遅く、夜の睡眠時間は短い傾向がみられた。特に母親がフルタイムで就労する場合は就寝時刻が遅く、にもかかわらず起床時刻は早い。睡眠時間の確保のために保育園内での午睡が重要な位置を占めることが、改めて示される結果となった。

園外（自宅）での活動時間、つまり親が子に接する時間の長さは母親の就労形態によってはっきりと違いがみられた。子どもと接する時間の長短は、親の育児不安や育児の悩みにも影響を及ぼすことが考えられる。この点については後の章で分析を行いたい。

- 1 「預かり保育」は幼稚園利用者を想定した選択肢であったが、保育園利用者も28.0%が利用していると回答している。回答者によって選択肢のとらえ方が異なってしまったことが考えられる。

第5章 保護者の子育て不安

本章では、現代の親が抱える子育て不安について明らかにする。本章の主な分析課題は次の2点である。1点目は子育て不安を「育児不安」「子育ての悩み」「体罰傾向」の3つの面からとらえ、記述的に明らかにすることである。2点目は子育て不安が大きな親の特徴について、子どもの年齢や数、親の属性、子育てに関わる親の行動、配偶者との関わりなどから検討することである。この作業を通じて、現代の親の子育て不安に応える手がかりを提示することを本章の目的とする。

1. 保護者の育児不安

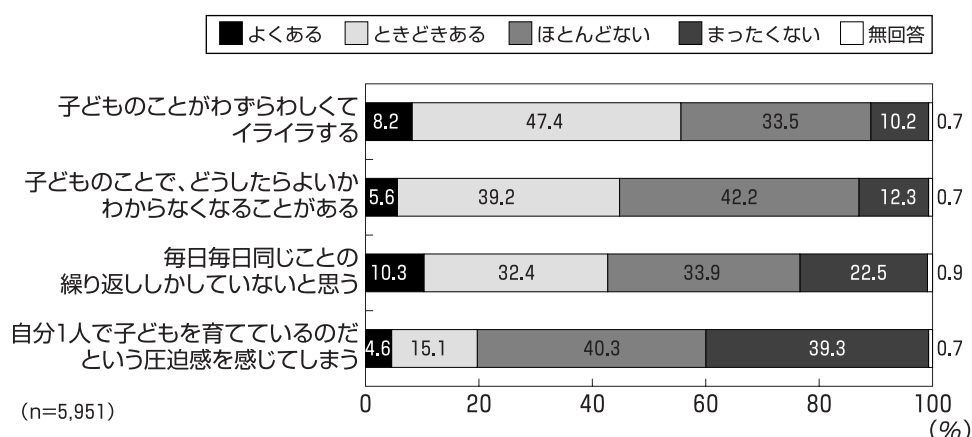
(1) 育児不安の測定尺度

育児不安とは「子の現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態」(牧野,1982)である。本調査では牧野(1982)の作成した育児不安尺度を一部用いた。質問項目は、図表5-1にあげた「子どものことがわずらわしくてイライラする」から「自分1人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう」までの4項目である。各項目について「よくある」「ときどきある」「ほとんどない」「まったくない」の4件法でたずねた。

① 育児不安の単純集計結果

育児不安の各質問項目の単純集計結果は、図表5-1のとおりである。「子どものことがわずらわしくてイライラする」はあるという回答(「よくある」「ときどきある」の合計)が半数以上、「子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある」と「毎日毎日同じ事の繰り返ししかしていないと思う」は、あるという回答と、ないという回答(「ほとんどない」「まったくない」の合計)とが約半数ずつという結果となっている。

図表5-1 育児不安の単純集計結果



②育児不安尺度の妥当性と信頼性

育児不安の各質問項目について因子分析を行ったところ、抽出された因子は1つであった（図表5-2）。また信頼性係数 α は0.77と高かった。よって各質問の個人の回答について「よくある：4点」「ときどきある：3点」「ほとんどない：2点」「まったくない：1点」と配点し、4項目の得点を合計し、育児不安を測る合成尺度を作成した。育児不安尺度の記述統計量は図表5-3のとおりである。

図表5-2 育児不安の因子分析結果
（主因子法、バリマックス回転、表中の数値は回転後の因子負荷量）

因 子	因子1 育児不安
a) 子どものことがわすらしくてイライラする	0.697
b) 子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある	0.713
c) 自分1人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	0.674
d) 毎日毎日同じことの繰り返ししかしていないと思う	0.630
固有値	1.844

図表5-3 育児不安尺度の記述統計量、信頼性係数

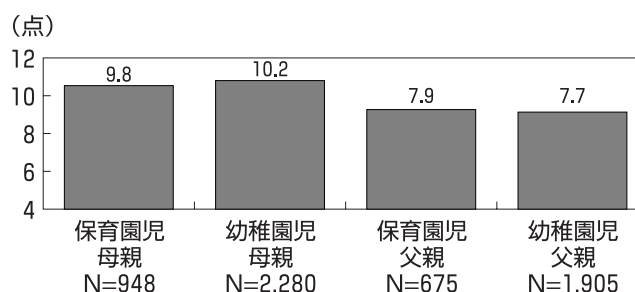
度 数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	信頼性係数 α
5383	4	16	9.06	2.58	0.77

(2) 保護者の属性と育児不安との関連

①通園先による育児不安

まず通園先と父母別に育児不安を比較した。母親と父親とでは育児不安に大きな差がみられる。平均値の差の検定を行ったところ父母間の差は統計的に有意であった（ $p<.01$ ）。幼稚園児の母親が最も育児不安が高い。保育園児母親と幼稚園児母親との間で平均値の差の検定を行っところ、この差も統計的に有意であった（ $p<.01$ ）。

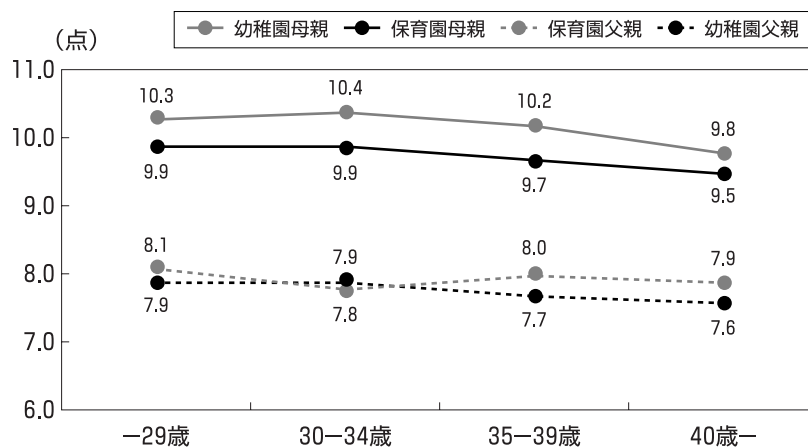
図表5-4 通園先・父母別育児不安



② 父母の年齢による育児不安

父母の年齢によって、育児不安に違いがみられるかどうかを検討した結果が図表5-5である。これから、親の年齢が高いほうが育児不安が低いという傾向がわずかにみられる。しかし親の年齢が高いと長子年齢も高いという関連があるため、長子年齢による影響であることも考えられる。

図表5-5 父母の年齢別育児不安

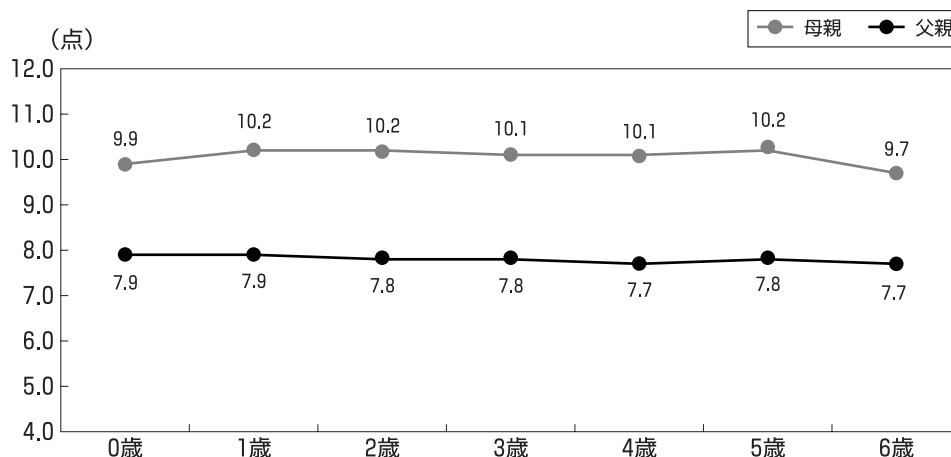


(3) 子どもの数と年齢による育児不安

① 末子年齢別育児不安

一般的に末子年齢が低いほど、子どもには手がかかる。「社会生活基本調査」(総務省,2002)では末子年齢が低いほど育児・家事に要する時間が多いことが示されている。また2章でも末子年齢が低いほうが父母の平日の家事・育児時間が多いという結果がみられた。そこで末子年齢によって育児不安に差がないかどうかを確認した。母親の育児不安は末子が0歳、6歳の時点では1~5歳時点よりも低い、父親については末子年齢による差はほとんどみられない。

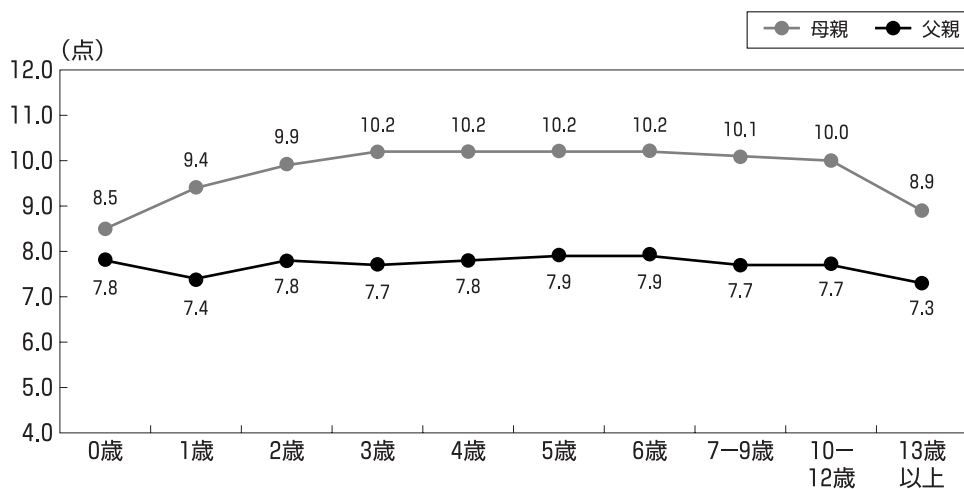
図表5-6 末子年齢別父母の育児不安



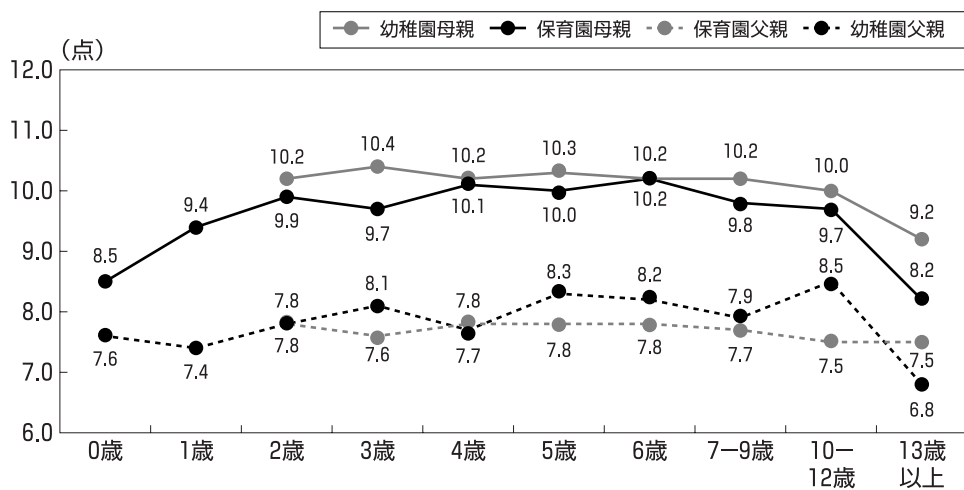
②長子年齢別育児不安

長子の年齢は子育て経験の長さを示す指標と考えられるため、つぎに長子の年齢による育児不安の違いを検討した。母親の育児不安は長子の年齢によって逆U字カーブを描いている。長子が0歳の時点では低いのが1歳、2歳、3歳となるにしたがって上昇し、3～6歳の間はほぼ一定である。そして7歳以降に下降してゆく。父親については母親のように長子年齢による明確な傾向はみられない。

図表5-7 長子年齢別父母の育児不安



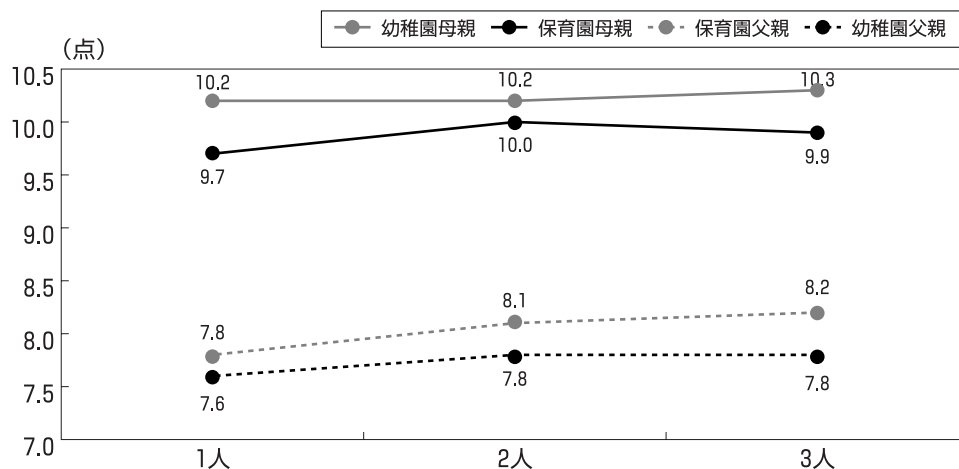
図表5-8 長子年齢・通園先別父母の育児不安



③子ども数による育児不安

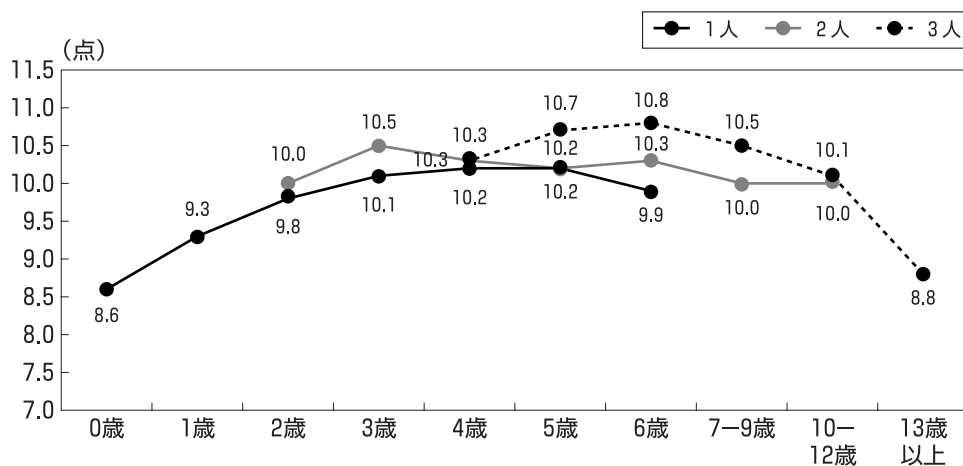
子ども数は子育てに手がかることを示すと同時に、子育て経験の多さを示す指標であるとも考えられる。子ども数による育児不安の違いをみると、父母ともに子が「1人」よりも「2人」「3人」のほうが育児不安は若干高い。(図表5-9)。

図表5-9 子ども数別父母の育児不安



長子年齢別・子ども数別に母の育児不安を示した結果図表5-10である。子ども数の多さと長子年齢の高さは関連が高いため、長子年齢を分けた上で子ども数と育児不安との関連を検討した。なお、父親の育児不安は長子年齢によって明確な傾向を示さないため、集計は母親のみを対象に行った。この図から、母親の育児不安は長子年齢による影響を受けることが分かる。同時に、長子の年齢が「5歳」「6歳」の時点には、むしろ子ども数が多いほうが育児不安が高い傾向がみとれる。

図表5-10 長子年齢・子ども数別母親の育児不安¹



(4) 子との接触量と育児不安

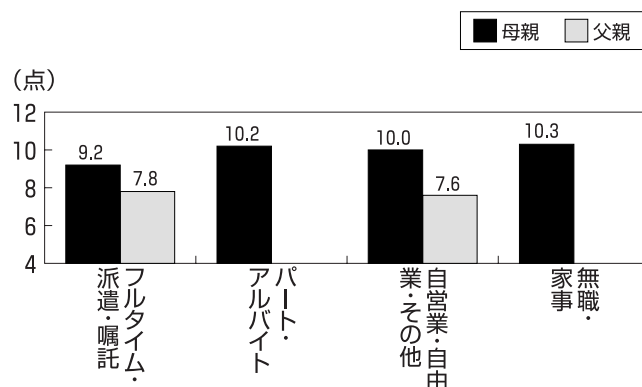
①母親の就労形態別育児不安

4章では母親の就労形態によって子どもの生活時間には違いがみられることが示された。特に在園時間の違いが大きいため、親が子に接する時間は就労形態によって大きく規定されることが

分かった。

そこで親の就労形態別に育児不安を検討したところ、母親については「フルタイム・派遣・嘱託」などフルタイム就労がもっとも育児不安は低く、「無職・家事」が最も高い。母親の育児不安は子との接触時間が長いほうが高いと言えるかも知れない。父親は「パート・アルバイト」「無職・家事」についてはサンプル数が少ないために比較ができない。「自営業・自由業・その他」よりも「フルタイム・派遣・嘱託」のほうがやや高いという結果である。

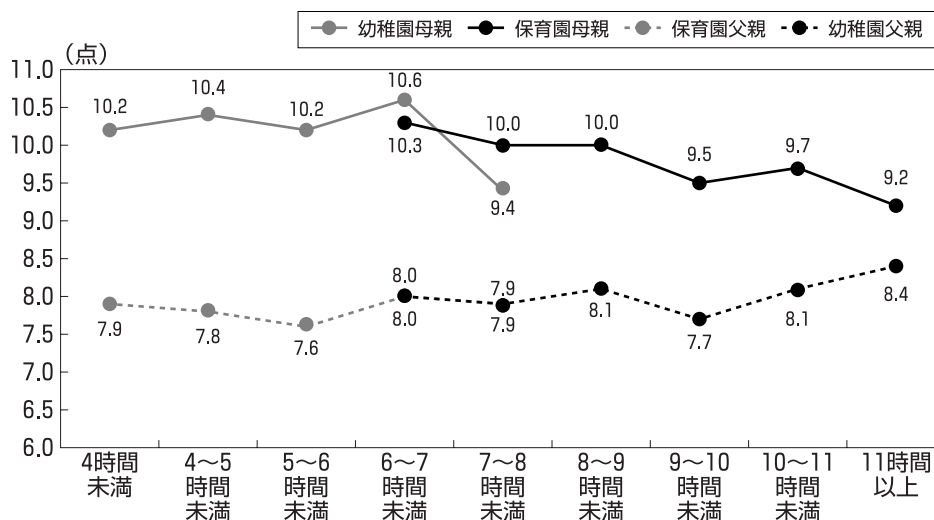
図表5-11 就労形態別育児不安



②子の在園時間との関連

母親の育児不安は、母親の就労形態によってやや違いがみられることが分かった。そこで子との接触量と育児不安との関連を検討するため、子の在園時間別に育児不安を示した結果が図表5-12である。母親については、子の在園時間が長いほど育児不安が低い傾向がみられる。言い換えると、子との接触量が少ないほうが育児不安は低い。子の在園時間と父親の育児不安についてははっきりとした傾向があるとは言えない。

図表5-12 子の在園時間別育児不安

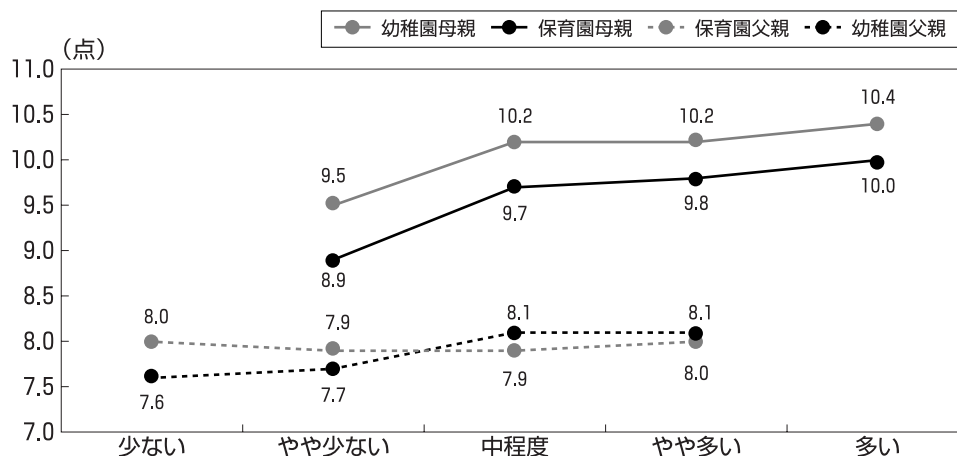


③子育て行為頻度との関連

2章で示した「子育て行為の週あたりの頻度」を得点化し²、子育て行為の頻度の高さと育児不安との関連をみた図が図表5-13である。保育園児の父親以外については、子育て行為の頻度が高いほうが育児不安も高いという関連がみられる。

育児行為の頻度が同じでも、保育園児の母親よりも幼稚園児の母親のほうが、育児不安は高い傾向がみられる。在園時間別育児不安（図表5-12）と合わせて考えると、育児行為の頻度よりも、子どもとの接触時間の長さのほうが、母親の育児不安に関連があると考えられる。

図表5-13 子育て行為頻度別育児不安



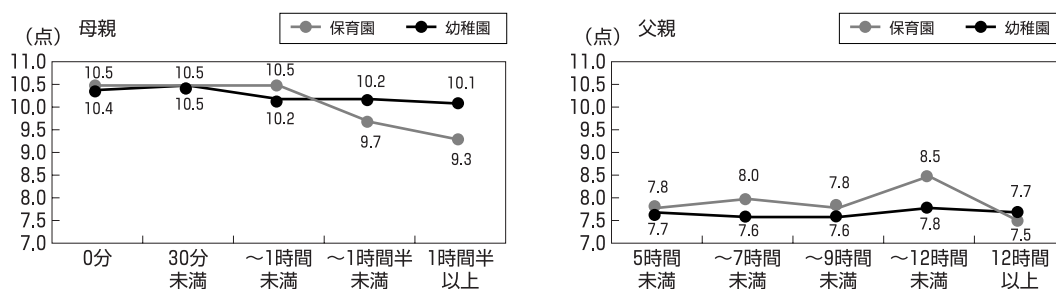
(5) 配偶者の関わりと育児不安

①配偶者の家事・育児時間との関連

配偶者の家事・育児時間と育児不安との関連を示したものが図表5-14である。この結果より、父親については配偶者（母親）の家事・育児時間の影響は読み取れないが、母親の育児不安は配偶者（父親）の家事・育児時間との関連があることが分かる。保育園児の母親については配偶者の家事・育児時間が1時間以上ある場合に育児不安は低い。幼稚園児の母親については、配偶者の家事・育児時間が30分以上になると、育児不安が徐々に低くなってゆく傾向がある。

母親の育児不安を軽減するには、父親が家事・育児をできるだけ行うこと、少なくとも1時間以上は行うことが一定の効果を持つことが考えられる。

図表5-14 配偶者の家事・育児時間による母親の育児不安

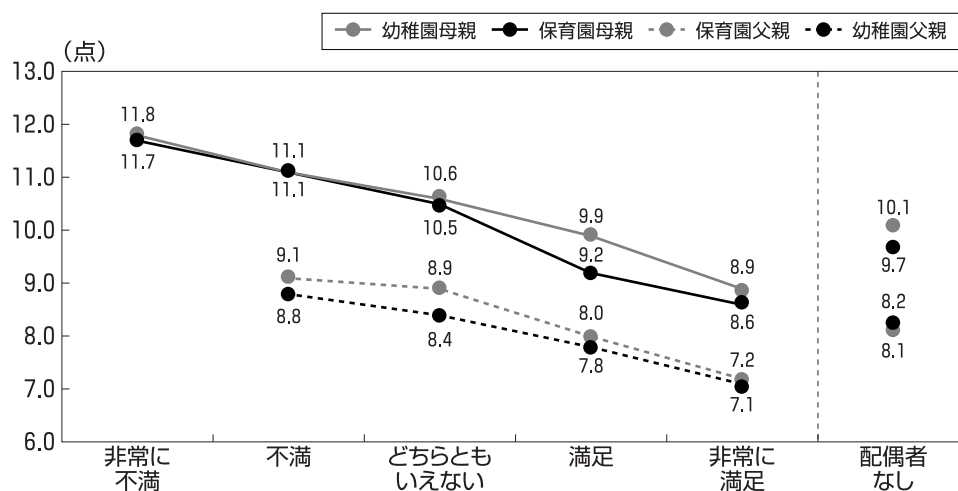


②配偶者の育児や子どもとの関わりに対する満足度の影響

配偶者の育児や子どもとの関わりへの満足度と育児不安との関連を示したものが図表5-15である。配偶者がいないケースも同時に比較を行った。この結果より、父母ともに、また通園先にかかわらず配偶者に対する満足度が高い場合に育児不安が低いという傾向がはっきりとみられる。配偶者の育児や子どもとの関わりに満足していない場合よりも、むしろ配偶者がいないほうが育児不安は低い。

配偶者の関わりへの満足度の影響は、これまでにみてきた子どもの年齢や子との接触時間との関連よりも、ずっと明瞭な傾向が示された。育児不安の軽減には、配偶者の育児や子どもとの関わりに対して満足できることが何よりも大切であると言えよう。

図表5-15 配偶者の育児や子どもとの関わりへの満足度と育児不安



2. 保護者が抱える子育ての悩み

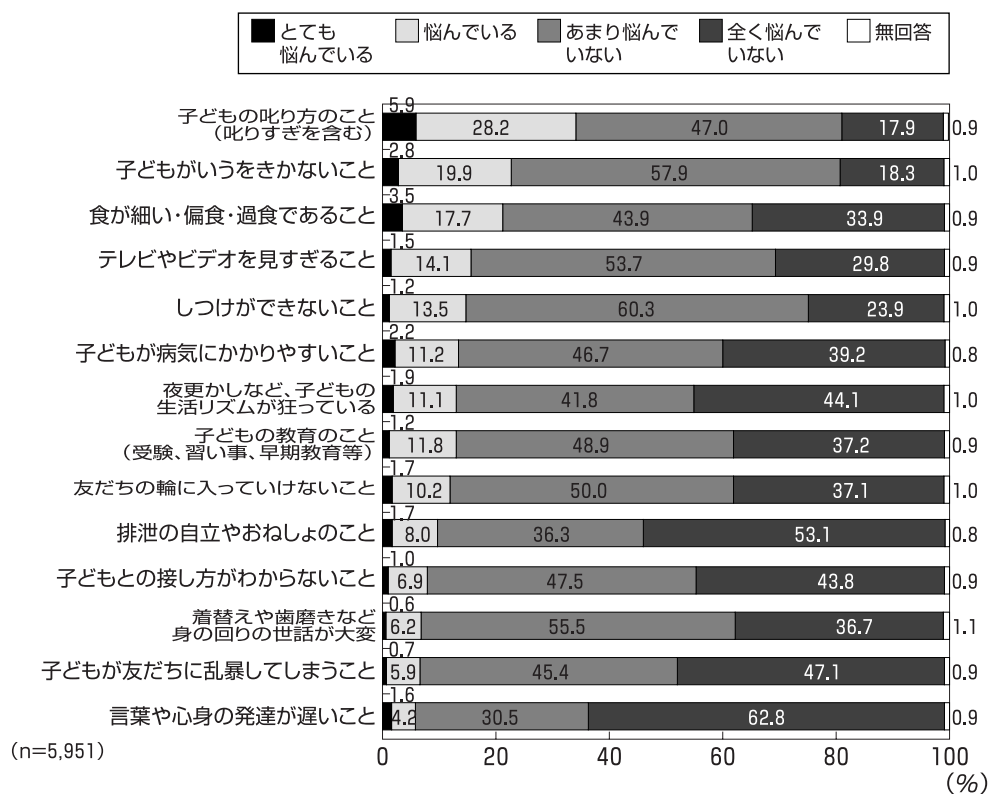
(1) 子育ての悩みを測定する尺度

子育ての悩みを測定する質問項目は本研究会で独自に作成したものである。育児不安が“漠然とした情緒の状態”を表すのに対し、ここでは具体的な子育ての悩みの有無をとらえている。質問項目は図表5-16にあげた「子どもの叱り方のこと（叱りすぎを含む）」から「言葉や心身の発達が遅いこと」までの14項目である。各項目について「とても悩んでいる」「悩んでいる」「あまり悩んでいない」「全く悩んでいない」という回答選択肢を用意し、4件法でたずねた。

① 子育ての悩みの単純集計結果

子育ての悩みを測定する項目の単純集計結果は、図表5-16のとおりである。保護者が悩んでいる割合が最も高いのは「子どもの叱り方のこと（叱りすぎを含む）」「子どもがいうことをきかないこと」であった。いずれの質問項目も「あまり悩んでいない」または「全く悩んでいない」という回答の割合が最多であり、全般的に以下に挙げた質問項目について悩んでいる親は少数派である。

図表5-16 子育ての悩みの単純集計結果



②子育ての悩み尺度の妥当性と信頼性

子育ての悩みを把握する各質問項目について因子分析を行ったところ、3つの因子が抽出された（図表5-17）。しかし各因子の信頼性係数をみると、各因子別よりも全項目を対象とした場合のほうが信頼性係数が高い。よって全14項目を対象にして子育ての悩みを測定する合成尺度の作成を行った。具体的には、各質問の個人の回答について「よくある：4点」「ときどきある：3点」「ほとんどない：2点」「まったくない：1点」と配点し、14項目の得点を合計した。子育ての悩み尺度の記述統計量は図表5-18、得点分布は図表5-19のとおりである。

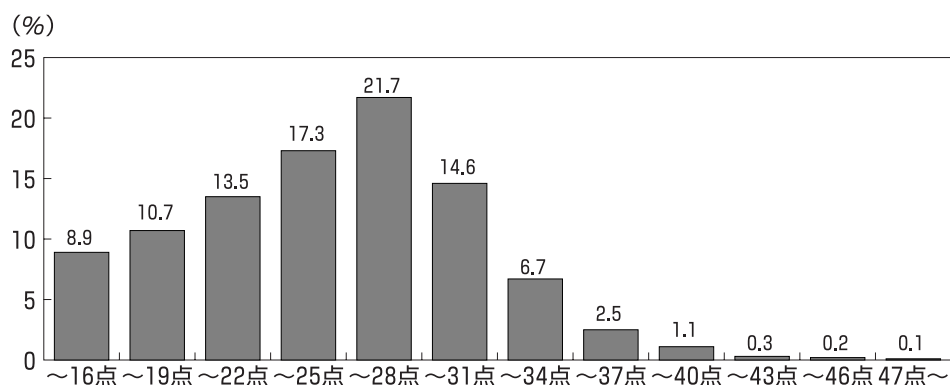
図表5-17 子育ての悩みの因子分析結果
（主因子法、バリマックス回転、表中の数値は回転後の因子負荷量）

因 子	因子1 しつけの 悩み	因子2 発達・発育 の悩み	因子3 生活習慣 の悩み
m) 子どもの叱り方のこと（叱りすぎを含む）	0.811	0.140	0.117
a) 子どもがいうことをきかないこと	0.640	0.191	0.239
n) 子どもとの接し方がわからないこと	0.585	0.362	0.111
e) しつけができないこと	0.566	0.312	0.365
l) 子どもの教育のこと（受験、習い事、早期教育等）	0.355	0.321	0.152
k) 言葉や心身の発達が遅いこと	0.136	0.610	0.140
j) 排泄の自立やおねしょのこと	0.150	0.508	0.147
h) 子どもが病気にかかりやすいこと	0.157	0.451	0.192
g) 友だちの輪に入っていけないこと	0.270	0.440	0.148
b) 着替えや歯磨きなど身の回りの世が大変なこと	0.310	0.404	0.384
i) 食が細い・偏食・過食であること	0.204	0.368	0.293
f) 子どもが友だちに乱暴してしまうこと	0.310	0.338	0.181
c) 夜更かしなど、子どもの生活リズムが狂っていること	0.114	0.198	0.662
d) テレビやビデオを見すぎる	0.228	0.212	0.603
固有値	2.291	1.911	1.408

図表5-18 子育ての悩み尺度の記述統計量、信頼性係数

記述統計量	平均値	平均値	平均値	平均値	標準偏差	信頼性係数 α
1. 子育ての悩み総合尺度	5,310	14	51	24.91	5.82	0.86
2. しつけの悩み	5,367	5	20	9.63	2.64	0.80
3. 発達・発育の悩み	5,349	7	25	11.75	3.04	0.74
4. 生活習慣の悩み	5,383	2	8	3.56	1.24	0.65

図表5-19 子育ての悩み得点の分布(14項目の合計点)

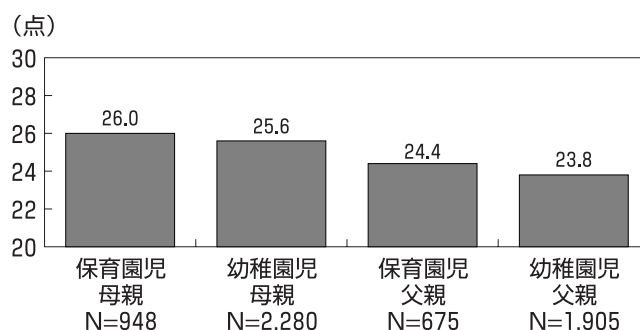


(2) 保護者の属性と子育ての悩みとの関連

①通園先による違い

育児不安尺度と同様に、まず通園先別、父母別に子育ての悩みを確認したところ、育児不安は幼稚園児の母親が最も高かったが、子育ての悩みは保育園児の親のほうがやや多い。しかしその差は統計的には有意ではなかった。父親は母親と比べて子育ての悩みは少なく、父母間の差は統計的にも有意である。

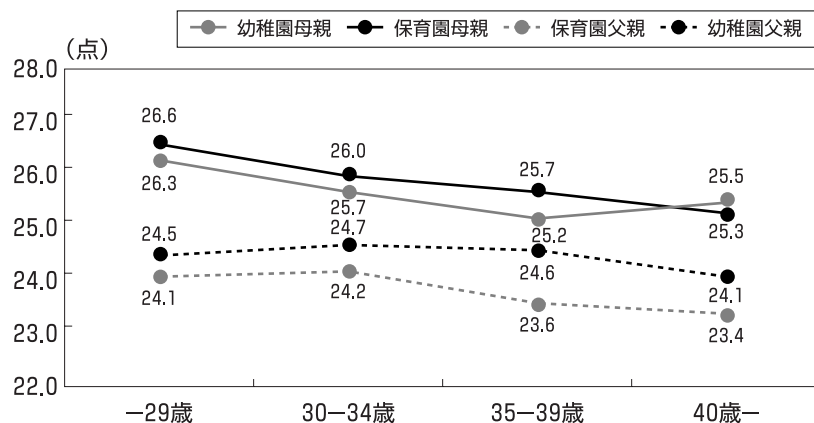
図表5-20 通園先・父母別子育ての悩み



②父母の年齢による違い

父母の年齢によって、子育ての悩みの多さが違うかどうかを検討した結果が図表5-21である。ここから、保育園児母親については年齢が高いほど悩みが少ないという関連がみられる。幼稚園児母親、保育園児父親、幼稚園児父親については一直線の関連はみられないが、親の年齢が高いほうが悩みは少ない。しかし育児不安と同様に、親の年齢よりも子の年齢が影響していることも考えられる。

図表5-21 父母の年齢別子育ての悩み

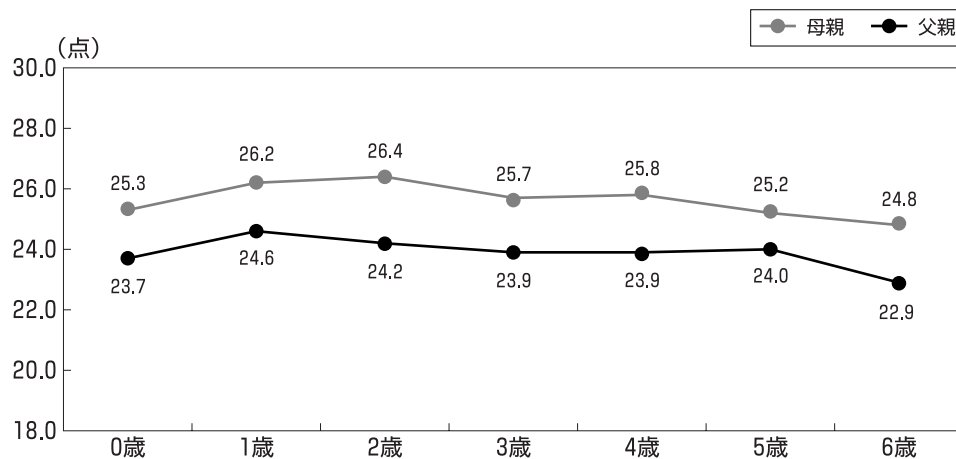


(3) 子どもの数と年齢による子育ての悩み

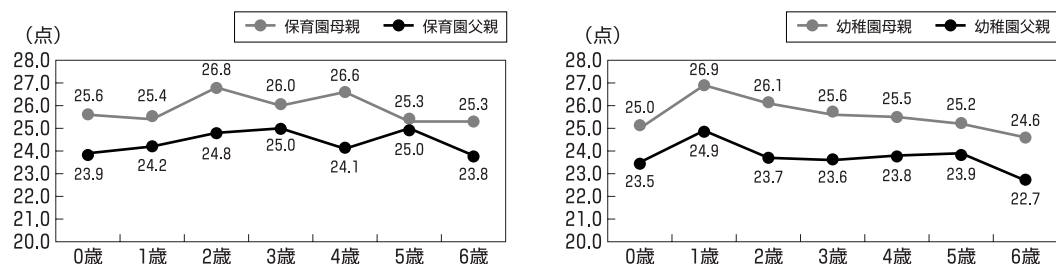
①末子年齢による違い

末子年齢によって大きな違いはみられないが、父母ともに末子が1～2歳の時点が高く、その後はゆるやかに低下してゆく傾向がある（図表5-22）。通園先別にとらえると、幼稚園児の父母では末子が1歳のときに最も高いが、保育園児の父母については特定の傾向はみられない（図表5-23）。

図表5-22 末子年齢別父母の子育ての悩み



図表5-23通園先別末子年齢別父母の子育ての悩み

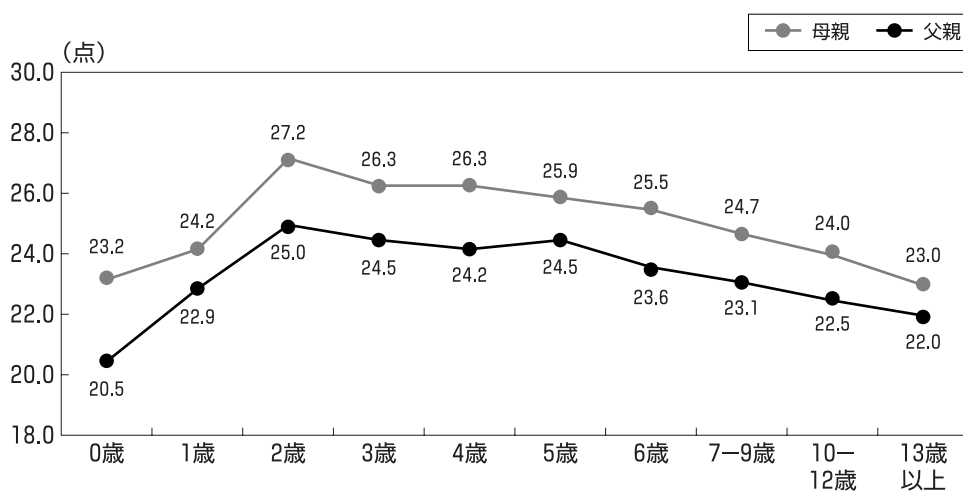


②長子年齢による違い

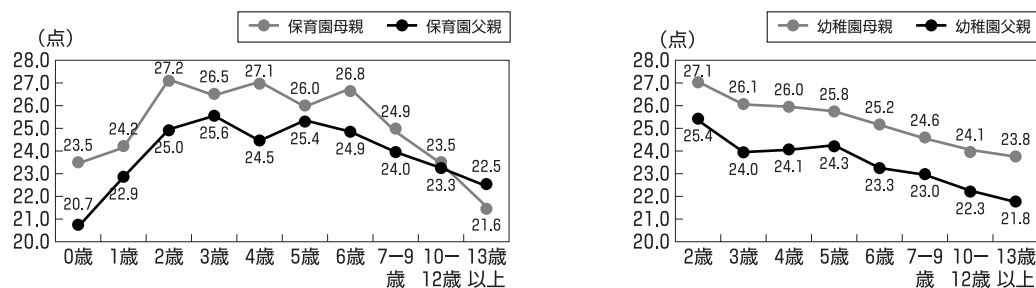
子育ての悩みは末子の年齢よりも、長子の年齢によって父母で同様の明瞭な傾向がみられる(図表5-24)。子が0歳の時点では低いが1~2歳になるにつれて急上昇し、ピークは2歳である。その後、ゆるやかに低下してゆく。子どもの成長にしたがって、本質問紙で提示したような子どもの行動や状況への懸念は収まってゆくのだろう。しかし末子年齢よりも長子年齢のほうがはっきりした傾向を示すことは、子育ての悩みには子育て経験の長さが大きく影響することといえるだろう。

長子年齢別・通園先別に父母の子育ての悩みをみると、幼稚園の父母については子育ての悩み得点が2歳以降に徐々に下がってゆくが、保育園の父母については2~6歳の間は上下し、低くなるのは7歳以降である(図表5-25)。保育園児のほうがサンプル数が少ないため、長子年齢別の集計結果では安定した数値が得られなかったことが考えられる。他にも要因があるかも知れないが、今後の検討課題としたい。

図表5-24 長子年齢別父母の子育ての悩み



図表5-25 長子年齢別・通園先別父母の子育ての悩み

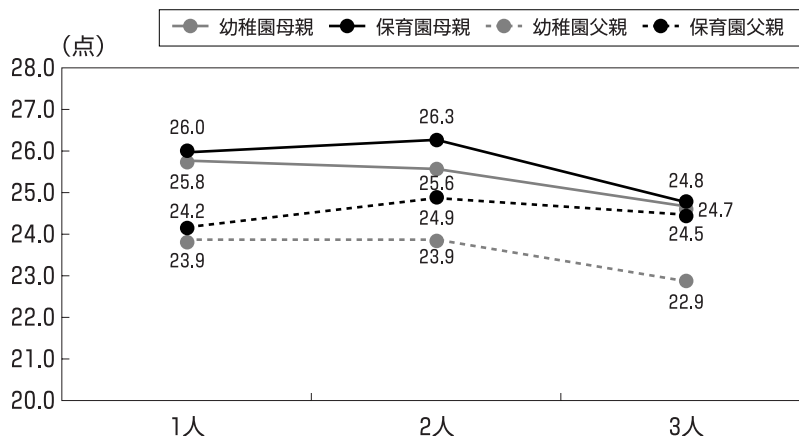


③子ども数による違い

子ども数による子育ての悩みの違いを示した結果が図表5-26である。保育園児の父親を除くと、子育ての悩みは子ども数が「1人」と「2人」では大差がないが、「3人」になると低くなる傾向がみられる。またサンプル数が少ないため図表には掲載していないが、子ども数が「4人以上」の場合はさらに低くなることが確認された。

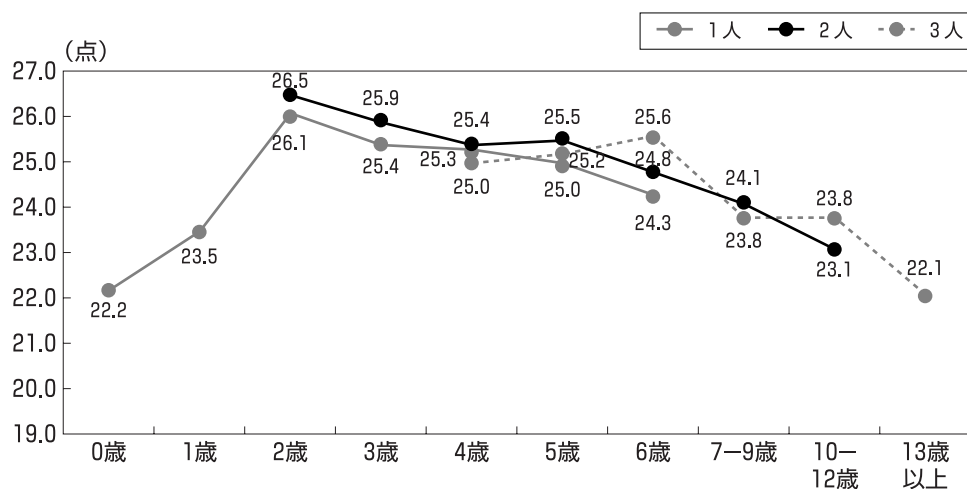
子ども数が増えるにつれ、長子の年齢も上昇するのが一般的であるため、子ども数の影響だけではないかも知れない。いずれにせよ、子育ての経験が長いこと、育てた子ども数が多いこと、言い換えれば子育ての経験が豊富になるにつれ、子育ての悩みは少なくなってゆくことがうかがえる。

図表5-26 通園先別・子ども数別父母の子育ての悩み



子ども数の多さと長子年齢の高さは関連が高いため、長子年齢を分けた上で子ども数と子育ての悩みとの関連を示した結果が図表5-27である。子ども数「1人」「2人」「3人」が同時に比較できる長子年齢が「4歳」「5歳」「6歳」の時点で比較すると、子ども数が多いほうが悩みが少ないという関連はみられない。ここから、子育ての悩みについては長子年齢の影響が非常に大きいことが分かる。

図表5-27 長子年齢別・子ども数別子育ての悩み(父母の合計点)

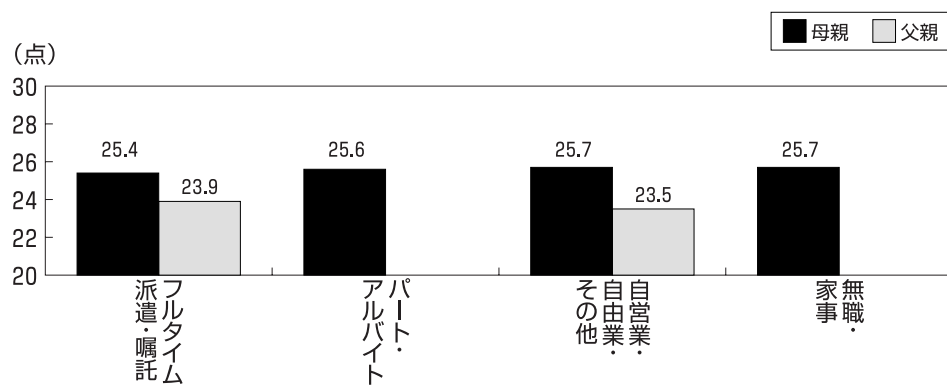


(4) 子どもとの接触量と子育ての悩み

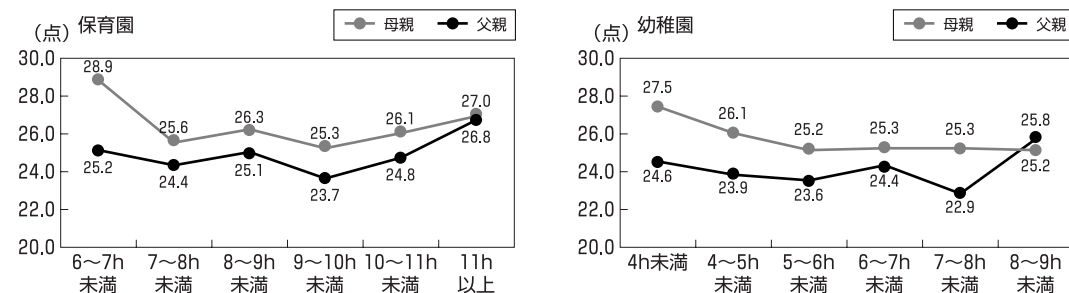
①就労形態と在園時間による違い

前節では、母親の育児不安はフルタイム就労の場合に最も低いことが示された。また子の在園時間が長いほど育児不安が低いという傾向がみられた。そこで親の就労形態による子育ての悩みを検討したところ、父母ともに就労形態によって子育ての悩みに大きな違いはみられなかった(図表5-28)。また子の在園時間による違いに着目すると、幼稚園母親については子の在園時間が長いほど子育ての悩みも少ないという傾向があるが、父親や保育園母親については特定の傾向はみられなかった(図表5-29)。子育ての悩みには、育児不安とは違う要因が影響すると思われる。

図表5-28 就労形態別子育ての悩み



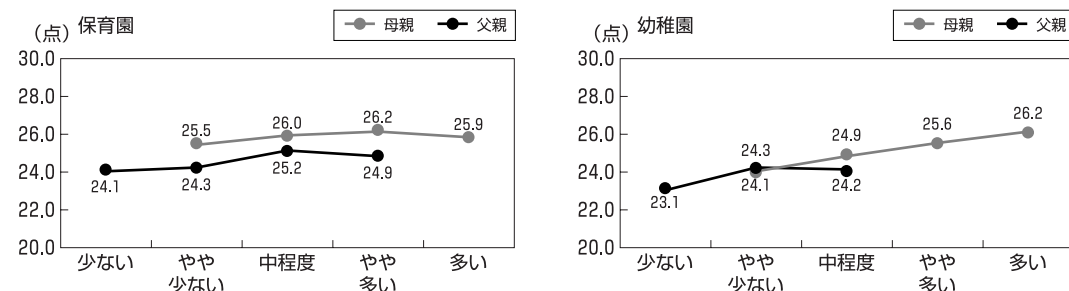
図表5-29 通園先別・子の在園時間と子育ての悩み



②子育て行為頻度との関連

「子育て行為の週あたりの頻度」を、前節と同様に得点化し²、子育て行為の頻度の高さと子育ての悩みとの関連をみた図が図表5-30である。ここから、子育て行為の頻度が高いほうが、子育ての悩みも多いという傾向がみられる。特に幼稚園母親については、この傾向がはっきりしている。

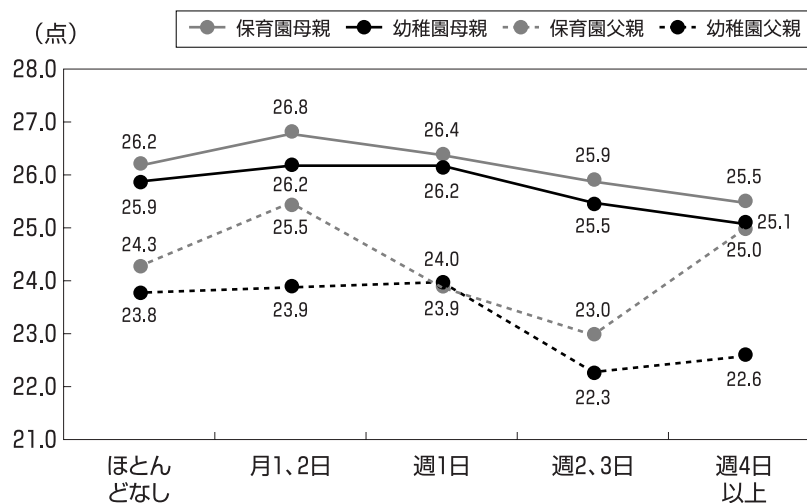
図表5-30 子育て行為頻度別子育ての悩み



③子どもが友達と遊ぶ様子をみる頻度との関連

自分の子どもだけでなく、他の子どもの様子を直接知る機会の豊富さが、子育ての悩みを軽減するのではないかと考えられる。このような観点から「子どもが友達と遊ぶ様子を見る頻度」と子育ての悩みとの関連を見たものが図表5-31である。保育園母親、幼稚園母親、幼稚園父親については「週2,3日」「週4日以上」など、頻度が多いほうが悩みは少ないという傾向がみられる。保育園父親は一定の傾向はみられない。

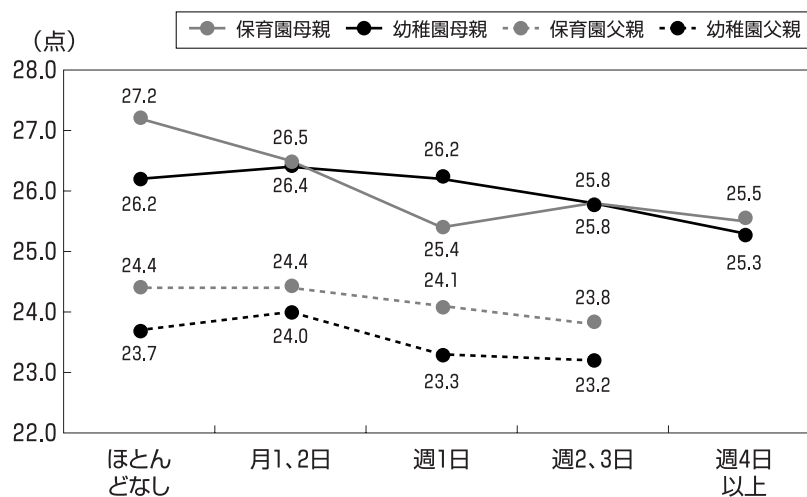
図表5-31 子どもが友達と遊ぶ様子をみる頻度と子育ての悩み



④同じ園の保護者と話す頻度との関連

同年齢の子を持つ保護者同士で話をする機会は、子育ての悩みを共有したり解消したりすることにつながるがと考えられる。そこで「同じ園の保護者と話す頻度」と子育ての悩みとの関連を検討した（図表5-32）。「子どもが友達と遊ぶ様子を見る頻度」と同様に、「同じ園の保護者と話す頻度」も高いほど、悩みが少ない傾向がみられる。

図表5-32 同じ園の保護者と話す頻度と子育ての悩み得点



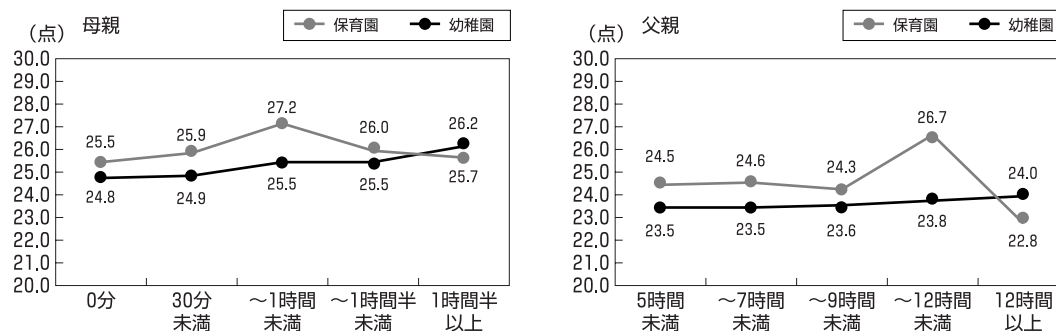
(5) 配偶者の関わりと育児不安

①配偶者の家事・育児時間との関連

配偶者の家事・育児時間と子育ての悩みとの関連を示したものが図表5-33である。幼稚園父

母については、配偶者の家事・育児時間が長いほうが、子育ての悩みも多いという傾向がわずかにみられるが、総じて配偶者の家事・育児時間の長さとの関連はないことがうかがえる。育児不安とは異なる傾向が示された。

図表5-33 配偶者の家事・育児時間による子育ての悩み

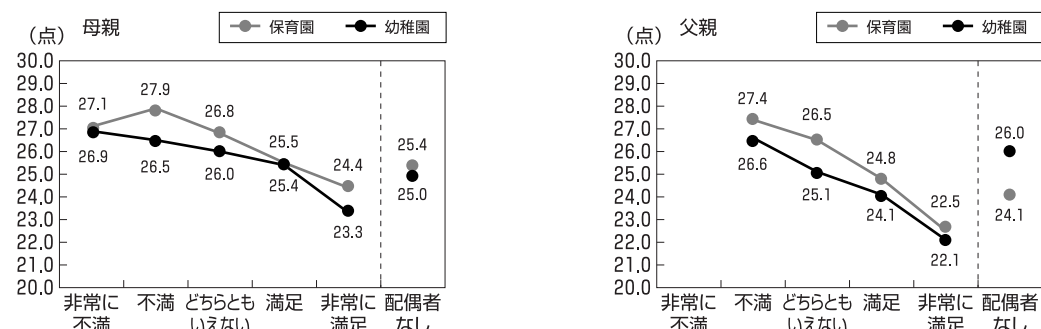


②配偶者の育児や子どもとの関わりに対する満足度の影響

配偶者の育児や子どもとの関わりへの満足度と子育ての悩みとの関連を示したものが図表5-34である。配偶者がいないケースも同時に比較を行った。育児不安と同様、父母ともに、また通園先にかかわらず配偶者に対する満足度が高い場合に子育ての悩みも少ないという傾向がはっきりとみられる。幼稚園父親以外では、配偶者の育児や子どもとの関わりに「非常に満足」していない場合、配偶者がいないほうが子育ての悩みは少ない。

配偶者の関わりへの満足度の影響は、これまでにみてきた子どもの年齢や子との接触時間との関連よりも、ずっと明瞭な傾向が示された。育児不安のみならず、子育ての悩みの軽減についても、配偶者の育児や子どもとの関わりに対して満足できることが何よりも大切であると言えよう。

図表5-34 配偶者の育児や子どもとの関わりへの満足度と子育ての悩み



3. 体罰傾向

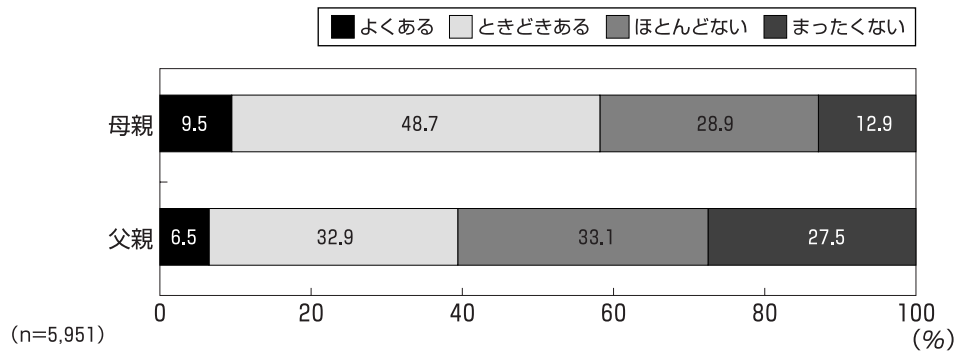
(1) 単純集計結果

体罰傾向についての質問項目は、「子どもを叱るときに、思わず手が出てしまうことがある」の

1項目であり、「よくある」「ときどきある」「ほとんどない」「まったくない」の4件法でたずねた。

単純集計結果は、図表5-35のとおりである。母親については「ときどきある」が最多であり、「まったくない」は1割強である。「よくある」も約1割を占める。父親は「よくある」「ときどきある」「ほとんどない」が約1/3ずつを占め、母親よりは“思わず手が出てしまうこと”は少ないようである。

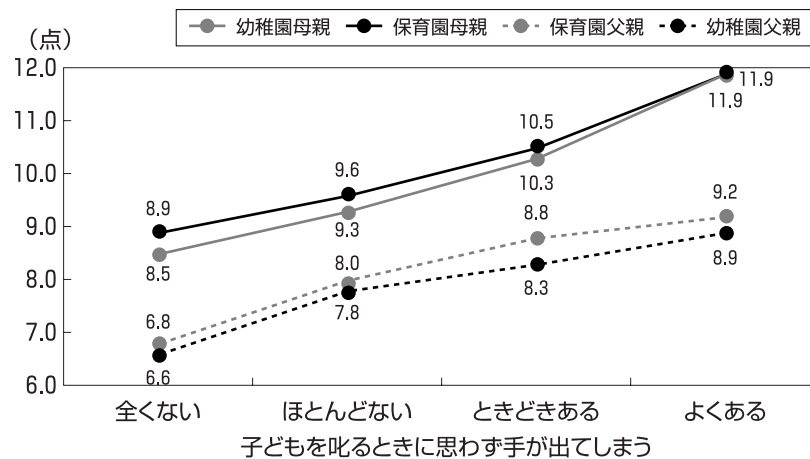
図表5-35 子どもを叱るときに、思わず手が出てしまうこと



(2) 体罰傾向と育児不安、子育ての悩みとの関連

① 育児不安との関連

図表5-36 育児不安と体罰傾向との関連

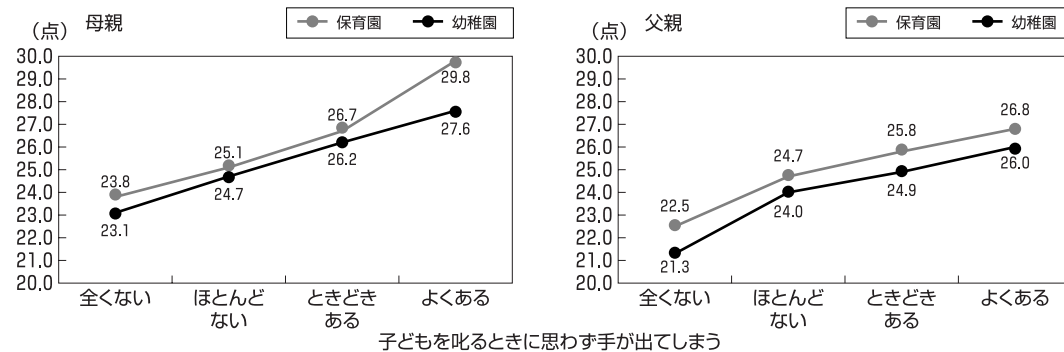


体罰傾向と育児不安との関連を示したものが図表5-36である。この図より、父母ともに、また通園先にかかわらず、育児不安が高い場合には体罰傾向が強いという傾向がはっきりとみられる。

図表5-37は子育ての悩みと体罰傾向との関連である。ここでも、父母ともに、また通園先にかかわらず、子育ての悩みが多いほど体罰傾向も強いという傾向がはっきりみられる。

子どもへの体罰傾向は、保護者の育児不安や子育ての悩みと密接な関係があることがはっきりと示される結果である。

図表5-37 子育ての悩みと体罰傾向との関連



4. まとめと考察

本章では現代の親が抱える子育て不安について「育児不安」「子育ての悩み」「体罰傾向」の3つの面からとらえ、大きな不安を抱える親の特徴について検討した。得られた結果をまとめ、現代の親に必要なと考えられる支援について考察したい。

(1) 子育て不安の様相

本調査では4つの質問項目から育児不安について把握した。集計結果では「子どものことがわからなくてイライラする」「子どものことで、どうしたらよいかわからなくなる」ことが「まったくない」と回答する親は少数であった。また「子どもを叱るときに、思わず手が出てしまうことがある」という設問で体罰傾向をとらえたところ、「ある」という回答（「よくある」「ときどきある」の合計）が約6割を占めた。これらより、多少なりとも子育てに不安を感じる現代の親の姿が浮かび上がった。

具体的な子育ての悩みを14項目からとらえたところ、全体的に「とても悩んでいる」「悩んでいる」という回答はさほど多くなかった。保護者の悩みや不安は、個々具体的な問題についての悩みというよりも、漠然とした不安感であることがうかがわれる。具体的な悩みで最も上位に挙げたのは「子どもの叱り方のこと」であり、次いで「子どもがいうことをきかないこと」であった。

「子どもを叱るときに、思わず手が出てしまうこと」が「よくある」保護者は多数ではないが、体罰傾向は育児不安とも子育ての悩みとも大いに関連があることが示された。この結果は、育児不安が高く、子育ての悩みを多く抱える保護者には手厚いサポートを行う必要性を感じさせられるものである。

(2) サポートが必要な保護者の特徴

① 育児不安を高める要因

育児不安は明らかに父親よりも母親のほうが高かった。母親の育児不安は長子年齢によって影響を受け、2～6歳の間は継続的に高く、子どもの年齢が上がるに従って直線的に減ってゆくもの

ではない。また長子が同年齢の場合は、子ども数が多いほうが育児不安が高い傾向がみられた。

育児不安は母親の就労形態によっても多少違いがみられ、フルタイム就労の場合に低く、無職・家事の場合が高かった。子の在園時間は短いほうが育児不安は高かった。母親の就労形態は親子の接触時間と密接な関わりがあるため、子と接する時間の長さが母親の育児不安の高さに結びつくことがうかがえた。

さらに配偶者が育児・家事を行う時間が1時間以上である場合に、母親の育児不安は低い傾向がみられた。育児不安と最も強い関係がみられたのは、配偶者の育児や子どもとの関わりに対する満足度であり、配偶者への満足度が低い場合には育児不安も高かった。

これらの結果を合わせると、長子が幼児期にある、言い換えると長子が保育園・幼稚園に通う年齢であること、親が育児中心の生活で子と接している時間が長いこと、配偶者のサポートが得られず母親が1人で育児を抱えることが、育児不安の高さにつながることが示唆された。

②子育ての悩みに影響を及ぼす要因

子育ての悩みは父親よりも母親のほうが多いが、父母間の差は育児不安ほど大きくなかった。また悩みは長子が2歳の時点が最も多く、その後徐々に減ってゆくというはっきりとした傾向がみられた。末子の年齢はさほど関係がみられなかった。子どもが同じ成長段階にあったとしても、2人目、3人目の場合は長子の子育て経験が活かされ、具体的な悩みにはつながらないのだろう。

子育ての悩みは母親の就労形態や子の在園時間の長さの影響はみられなかった。配偶者の家事・育児時間の長さとも無関係であった。これらの点は育児不安とは異なる結果である。また自分の子以外の同年齢の子どもの様子を直接知る機会や、同年齢の子を持つ保護者同士で話をする機会が多いほうが、子育ての悩みが少ないという関連もみられた。

以上のような結果から、具体的な子育ての悩みの有無に影響を及ぼすものは、育児不安の要因となる“育児を1人で抱え続ける大変さ”とは異なることが分かる。むしろ子育て経験の有無や同年齢の子の様子を知る機会の豊富さなど、子どもの発達過程を保護者が感覚的につかんでいるかどうか、子育ての悩みの有無を左右するといえよう。

(3) 求められるサポートの内容

育児不安は、母親1人が家事・育児を抱え続けることによってもたらされる。また育児は主に母親が担っている場合が多いため、まず母親がサポートの対象として重要であることが考えられる。しかし育児不安も子育ての悩みも、配偶者の育児や子どもとの関わりに対する満足度によって大きな影響を受けるという結果が得られた。母親のサポートには父親が非常に重要な役割を占めている。このことを考えると、母親を直接支援することのみならず、“父親が配偶者を支えること”をサポートするような取り組みも大切だと思われる。まず父親には「自分が家事・育児をすること」が母親の育児不安を軽減することを知ってもらうことが必要であろう。

子育ての悩みは、子どもの発達過程を保護者が知ることによって、ある程度解消されるといえる。保護者にとって、子どもの発達段階や子どもの叱り方、言うことをきかないときの対応方法を学べる機会が非常に重要であるといえよう。その際に母親のみならず父親もこのような機会を持つこと、そして父母が互いに相手の子どもへの関わり方に満足ができるようになることが大切

である。

また送迎時や行事などで様々な子どもの様子を見る機会や保護者同士で話をする機会があること、保育参加により保育のプロの対応方法に接することなど、保育園・幼稚園でなされている取り組みは、保護者の子育ての悩みの解消にとっても有効であると考えられる。

注1 サンプル数が10以下のカテゴリについては、図への記載を行っていない。全ての図について同様の処理を行っている。

2 「週4日以上」を5、「週2,3日」を4、「週1日」を3、「月1,2回」を2、「ほとんどなし」を1とし、15項目の行為の合計を算出した。合計得点を、回答者全員を対象とした分布が各20%ずつになるように5分類した。「15～32」＝少ない、「33～45」＝やや少ない、「46～59」＝中程度、「60～66」＝やや多い、「67～75」＝多い、という区分である。

参考文献

牧野カツコ、1982 「乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞」、家庭教育研究所編『家庭教育研究所紀要』 3:34-56